〈書評〉

イタリア中世宗教史研究における「女性の信仰生活」 *Vita religiosa al femminile (secoli XIII-XIV)*, Roma: Viella, 2019.

白川太郎
（早稲田大学大学院／日本学術振興会特別研究員ＤＣ２）

はじめに

中世のイタリア半島、特に一二世紀以後の半島北中部の信仰文化において女性たちが果たした役割の重要性は、つとに知られるところである。もちろん、初期中世のイタリア半島でも、女性たちが宗教的に顕著な役割を果たすことはあった。とはいえ、その多くは修道院の内部に限られていたし、その活動が史料上に目立った痕跡を残すことは（男性の場合に比較すると）少なかった[1]。対して一二世紀後半に、いわゆる「新しい信仰 Religiones novae」が広まると、女性たちの能動的・自立的な活動を記録する史料は増大する[2]。また、修道女だけではなく、俗人・第三会士として慈善や教育活動に従事した女性、説教者や神秘思想家、周囲から「聖人」ないし「異端者」として崇敬・迫害を受けた女性など、その記録される類型も豊富となる[3]。一四世紀から一五世紀へと時代を下っていくと、女性たち自身による史料もまた、質量ともに増加していく。それに比例して、男女の神学者・哲学者・説教者・預言者による「女性」性ないし「男性／女性」を主題とした言説・表象史料も、後期中世には増大の一途をたどる。

盛期・後期中世の女性たちの活動や「女性」をめぐる言説・表象・思想は、特に二〇世紀後半の史学史上においても重要な論点となった[4]。近現代イタリアにおける中世宗教史研究は、一二～一四世紀の「宗教運動／異端運動」に同時代的価値を仮託し続けてきた[5]。この「女性の出現」は、一九世紀末の女性解放運動から第二波フェミニズムの影響のもと、イタリアの宗教史研究において注目された[6]。この点において、中世宗教史研究における「女性」は、同時代の知的文化を映し出す鏡ともなっている。

しかし、この歴史的・史学史的な二重の重要性にも拘らず、イタリア中世の宗教史／宗教史研究における「女性」の問題は、本邦での本格的な紹介がなされてこなかった[7]。もちろん総合的な叙述にあっては、「女性的霊性」一般やカテリーナ・ダ・シエーナなどの著名な女性への散発的な言及が見られるものの、その大半は研究史を十分に踏まえたものではない[8]。また、筆者はこれまでの研究で何人かの「女性預言者」を扱ってきたが、いずれの論考でも女性史的アプローチからは戦略的に距離を取っている[9]。こうした現状を踏まえ、本稿では、イタリア中世のキリスト教文化における歴史的「女性」という主題への最新かつ好便な導入として、Viella より二〇一九年に刊行された論集 *Vita religiosa al femminile (secoli XIII-XIV)* を紹介したい[10]。

本書は、ピストイアのイタリア歴史文化研究センターが主催した第二六回年次研究集会「一三～一四世紀における女性たちの信仰生活」（二〇一七年五月一九～二一日）の報告をもとにした論集である。報告者は、一九八〇～二〇〇〇年代のイタリア宗教史研究を牽引してきた大御所と一九九〇年代末以降に活躍を始めた

中堅の混成で、多くが年来の研究テーマの現況を手際よく要約している。そのため、個別論考の大半は概説的な内容となっており、より深く立ち入った議論を行おうとするならば、充実した注を読み込んで各自のモノグラフを手に取る必要がある。とはいえ、反面として初学者に親切な設計となっており、この領域への導入としてこの上ない「最初の一冊」といえよう。[11]

研究史概略

まず、本格的な内容の紹介へ入る前に、マウロ・ロンツァーニの「序論」を導きの糸としながら、本書へ至るまでの研究史の動向を簡略に跡づけておきたい。[12]

冒頭で述べたように、イタリア半島における女性たちの信仰を記録する史料は、一三世紀以降一挙に増大する。中世の文書史料を発掘・校訂・編纂した近世の考証学者たちも、この事実には気づいていた。しかし、一九世紀後半までの歴史学的営みにおいて積極的な関心の対象となったのは、カテリーナ・ダ・シエーナをはじめ、「聖人」として崇敬された一部の女性たちに留まった。[13]また、「聖女」たちの多くが経験した幻視・脱魂・法悦などの神秘体験は、啓蒙期以降の知的枠組では何らかの心理的異常・精神病・女性特有のヒステリーとみなされ、軽蔑的な扱いを受けた。例えば、一八世紀後半から一九世紀には、教会改革者や反教権主義者たちが中世の「異端者」を再発見し、政教分離や自由思想などの近代的価値を追求した先駆者として高く評価するようになる。しかし、一三世紀末に「異端者」とされたグリエルマやマイフレーダ・ダ・ピローヴァノの信仰は、精神的錯乱の産物として嘲弄か憐憫の対象となった。[14]こうした思潮に対抗して、ローマ・カトリック教会は、カテリーナ・ダ・シエーナやキアラ・ダ・モンテファルコなどの女性「神秘家」聖人への崇敬を推進し、その関連史料を公刊していく。[15]しかし、いずれの立場にあっても、二十世紀中盤までの中世教会史・宗教史における「女性」への関心は、「聖人・異端者」のような突出した存在に集中していた。

それに対して、より「普通の」女性たちへの関心が高まるのは、二十世紀後半のことである。もちろん、イタリア宗教史研究の創始者と言って過言ではないジョアッキーノ・ヴォルペの主著は、一一世紀末から一四世紀初頭に女性たちが主体的・能動的な信心を展開したことに言及している。[16]また、一九六〇～七〇年代になってイタリア半島北中部の贖罪運動に対する研究が進展すると、アッティーリオ・バルトリ・ランジェリらによって、女性たちの独自の活動にも光が当てられるようになった。[17]しかし、ヴォルペにしろ、第二次大戦後のイタリア宗教史研究を主導したラッファエッロ・モルゲンにしろ、「宗教運動」の主体は「俗人」・「民衆」・「新しい民」といった教会論的・社会的集団として把握されており、ジェンダー的把握は二次的であった。

中世の宗教史における女性研究を一個の自立した主題として定位したのは、やはりヘルベルト・グルントマンの主著『中世の宗教運動』である。[18]実のところ、グルントマンの異端・宗教運動研究が持つ画期性や独創性は、ドイツ史学の影響が強い日本やアメリカでは過大評価（ないし、歪んだ評価）がなされているように思われる。[19]彼が研究史上に占める位置は、一九世紀末から二十世紀初頭のイタリアやフランスにおける宗教史・宗教学や神学研究、

各修道会が持つ考証学的伝統、一九五〇年代に行われた「異端」起源論争を踏まえ、再考されるべきであろう。[20] むしろ、グルントマンの主著の最大の貢献は、それ以前の宗教運動研究が一要素としてしか論じてこなかった女性たちの活動に固有の意義とリズムを認め、その制度化と司牧をめぐる弁証法的対立を分析枠として明示したことにある。少なくともイタリアにおいては、一九七〇年代から今日に至るまで、この枠組は中世宗教史研究における女性の主要な論点を提供し続けている。

それ以前からのメールセマンやバルトリ＝ランジェリの業績やアンドレ・ヴォシェらの聖人研究、そしてグルントマンの主著のイタリア語訳（一九七四年）の影響を受けて、一九七〇年代末以降には北中部イタリアの各地で「女性」たちの信仰生活に関する事例研究が進展した。[21] 当初、そうした研究の多くは地域的な「聖人」の伝記史料を手がかりとするものに留まったが、マーリオ・センシやジョヴァンナ・カーサグランデが率いた半島中部の研究グループによる史料の博捜によって、一九八〇年代後半頃から、その視野と解像度は一挙に拡大・向上した。[22] イタリア宗教史の女性研究者が増大するのも一九七〇年代後半頃で、第二派フェミニズムやプロテスタント圏における女性聖職者問題の直接的・間接的影響を伺わせる。[23] この時期に登場した研究者は現在でも活動しており、本書にも寄稿している。さらに一九九〇年代に入ると、以下で見るように「宗教運動」や女性史の枠組にこだわらない研究も現れ、中世における女性の信仰生活の視角は多様化していった。イタリア中世宗教史における女性という問題は、本書でアンナ・ベンヴェヌーティが感慨深げに述べるように、定着した感がある。[24]

内容紹介

では、内容を具体的に見ていこう。

第一章「『戒律に従って生活する』：一三世紀における女性修道制の新形態」（マリア・ピーア・アルベルツォーニ）は、一三世紀初頭に出現した「新しい信仰」に従事する女性たちの生活形態を、戒律と制度化の進行という観点から論じる。[25] 一三世紀初頭までの西欧では、女性たちが信仰生活に専心しようとすれば、その選択肢は修道女しかなかった。[26] しかし、同時期には「新しい信仰」への従事を望む女性たちがヨーロッパ全域に出現し、その取り込みが教会にとって大きな問題となっていた。これらの女性たちの共同体は、いずれかの修道会の指導を受けている場合であれ、慈善や社会奉仕活動に携わっている場合であれ、何らかの修道戒律を厳格に遵守することよりも、修道制的な生活様式に緩やかに従うことで、「戒律的に生活」していた。[27] この時期には、カリスマ的な指導者の教えや福音書こそが真の「戒律」であるという発想も広く共有されていた。一三世紀初頭の教皇たちは、一方では各共同体への戒律賦与や「禁域化」を推進しつつ、現実の多様性を踏まえて柔軟な施策をとった。[28] しかし、一三世紀半ば以降には神学者・法学者のいずれもが信仰生活の厳格な「戒律化Regolarizzazione」および「均質化Normalizzazione」を推進していく。その政策の実行者かつ準拠枠となったのは、新たに誕生した托鉢修道会であった。「教会法が勝利した！」[29]

第二章「聖人伝的史料に見る生涯の歩み」（アンナ・ベヴェニャーティ）は、その予定された章題とは異なり、聖人伝的史料

が生み出された文脈に着目する。[30] 本書の中では例外的に短いものの、著者の主著の内容（一九九〇年）が簡潔に要約されており、さらに充実した文献目録案内が付されている。ベンヴェヌーティは、後期中世のイタリア都市において「聖人であること」への可能性が広まり、日常化したと指摘する。あらゆる身分・職業・立場の女性が「聖人」になりえた。托鉢修道会第二会は貴族家門や上層市民層に開かれていたし、そこに属さない女性たちは苦行や隠修、巡礼、慈善活動などを実践した。都市民（特に商人層）の結婚習慣や財産維持方策が経済的自立性に乏しい女性を増大させたことが、その背景にある。人的ネットワークを再編しつつ拡大する都市社会が新たな「パトロン」を必要としたことも、（不適切に「市民的宗教」と呼ばれる）崇敬を生み出すのに貢献した。[31] そして托鉢修道会は、決して女性たちの信仰文化の創造者ではなく、第三会など女性たちの活動の制度的受け皿を整備し、聖人伝的史料の生産を通じて崇敬を構築・利用したのである。[32]

第三章「籠居の現象：イタリアとヨーロッパの経験」（エレオノーラ・ラーヴァ）は、後期中世の「籠居 Reclusione」を国際的に比較する試みの中間報告である。[33] 従事者の数と密度においてイタリアが飛び抜けているものの、女性たちの籠居は、一三世紀以後にはヨーロッパ的な現象であった。[34] ラーヴァは、現在彼女が行っている比較プロジェクトへの導入として、籠居に関する①史料類型、②時代・地域的類型（初期中世から後期中世まで、北はスコットランドから東はバルカン半島まで）、③従事者の類型、④イタリアでの事例を簡単に紹介している。単体では物足りない内容であるものの、多くの基本文献が引用されている点では有益で、今後の成果刊行が待たれる。

第四章「イタリアとヨーロッパにおける「回心女」の現象」（クリスティーナ・アンデンナ）は、「更正」した娼婦を主な事例として、贖罪を求める女性たちを取り上げる。[35] 娼婦に改悛と贖罪を求める説教者は一一世紀末のフランスに最初期の記録があり、一二世紀にはフランス北西部やフランドル、北イタリアなどに多く出現した（ロベール・ダルブリッセルなど）。[36] 一二世紀末から一三世紀初頭のパリに形成された神学者サークルは、教会と社会の改革を模索する中で娼婦の問題にも取り組んでおり、その一員であるフルク・ド・ヌイイは、彼女たちの「更生」を援助する施設を創設している。娼婦の悔い改めを促すメッセージや運動は、その後ドイツなど周辺にも拡大していくが、アンデンナが示す興味深い事例に、東方の女性共同体がある。一三世紀初頭には、アリス・ド・シャンパーニュ（アンデンナは、彼女がフルクやペトルス・カントールから影響を受けていた可能性を示唆している）によって、キプロスやアッコン、トリポリなどの十字軍王国領に、悔い改めた元娼婦たちの共同体が点在していた。娼婦の「更生」という問題は、フランスから十字軍によって東方へ持ち込まれ、そして南イタリアへ逆輸入されたのである。[37]

第五章「ローマ教会と在地諸教会の選択：女性たちの信仰生活と向き合う教皇権と司教（一三～一四世紀）」（ジュリア・バローネ）は、第一章と同じく、教会による女性たちへの対処をテーマとしている。[38] バローネは、多くの論者と同じくインノケンティウス三世の治世を転機と位置づけ、彼による様々な信仰共同体の制度への取り込みを、実践的なものと評価する。また、彼の後継教

皇たちも（特にグレゴリウス九世のおかげで）俗人贖罪者たちには柔軟な姿勢を維持し、ニコラウス四世が全ての贖罪者共同体をフランチェスコ会第三会へ組織化しようと試みる（一二八九年）まで、重大な危機は生じなかったとする。[39] それに対して、女性の場合には「禁域 Clausura」の強制が大きな問題となる。[40] 禁域化は、伝統的なベネディクトゥス戒律に基づく女子修道院においては絶対的な規則ではなかったのに対し、一二世紀前半には新たに強く要請されることになる。その背景としては、聖職者たちの女性嫌悪や新時代への不信、中世社会における女性たちの生存の困難さといった要素に加え、禁域化の徹底が女性たちの司牧・支援を担当する聖職者の負担を減少させ、彼らによる霊的介入に秩序を与えることができる、というものが大きかった。いずれにせよ、バローネは、ローマ司教たちは女性に関する単一の方針を有しておらず、彼らの政策は実践上の必要や個人的志向、政治情勢によって左右されたことを強調する。ローマ以外についても、ボローニャ（サンタニェーゼ女子修道院）、スポレート（モンテファルコのサンタ・クローチェ女子修道院）、ヴェネツィアの事例が紹介され、各地の司教たちが地域的状況や女性たちの共同体の性格を考慮に入れ、統制の意志と一定の自由を与える必要性の狭間でバランスを保とうとしたことが示される。[41]

第六章「中世の施療院における女性たちの生活：宗教心と扶助のはざまで」（マリーナ・ガッツィーニ）は、女性たちと施療院の関係を多角的に紹介していく。[42] 概観にあたってガッツィーニが設定する補助線は、①女性が自身の記憶を自覚的に作り出す契機としての施療院創設／奉献、②施療院の内部における女性たちの活動、③女性たちと家族――その元々の家族と施療院という家族それぞれとの関係である。女性による施療院の創設は、男性に比べれば少ないとはいえ、中世のあらゆる時代・地域に確認される。それは王家・貴族家門に属する女性に限られた行いではなく、特に後期中世のイタリアでは都市民の新興エリート家系にも、自ら施療院を創設する事例が無数に見られた。[43] 創設者や管理者が女性であるという事実が施療院の性格に及ぼす影響はほとんど存在せず、その内部では男女や未成年者が多様な活動を展開していたし、その慈善活動の対象は病人から老人まで限定されていなかった。ガッツィーニは、労働と慈善を重んじる宗教心によって支えられた施療院という空間が、政治的・経済的・イデオロギー的な要因が交差する場であると同時に、中世における混合共同体的信仰の一形態であることを強調する。[44]

第七章「女性たちの神秘体験における沈黙と言葉」（アレッサンドラ・バルトロメイ・ロマニョーリ）は、一三世紀初頭における新たな「知」である「神秘体験／神秘思想 mistica」の言語 Linguaggio/discorso を扱う。[45] 人間による認識の新たな形態である「神秘体験」は、西方世界における形而上学と自然学の発展によって神の可知性が問題視され、信仰の危機が生じたことに由来する。この危機への対応として、合理主義的なスコラ神学と神秘体験は表裏一体である。しかし、一三世紀後半にはトマス・アクイナスが両者の和解に努めるにも拘らず、「信仰と理性」の断絶は深まっていく一方であった。後者は、歴史におけるキリスト体験を根本的問題とする以上、その中心的主題は身体となる。[46] 幻視・法悦・脱魂などの体験は、身体に関する言語ではなく、言語とし

ての身体を新たに発明することになる。この「神秘体験の言語」が明確な規則・形式・語彙を備えるには一七世紀を待たねばならず、中世における史料は聖人伝的ないし自伝的＝聖人伝的な記録である。[47] そして、この言語の歴史において、女性たちは特別な位置を占めてきたという。[48]

より具体的に見ていくと、バルトロメイ・ロマニョーリによれば、この言語は古ロタリンギアに出発点を持つ。その始まりはフランドルであり、ライン川流域を経て中部イタリアのウンブリア地方へ、さらに遅れてフランスや北欧へ至る。ブリテンに本格的な影響が及ぶのは一五世紀のことであり、イベリア半島への「侵入」はさらに後の近世のことである。[49] このうち、ヨーロッパ北部（フランドルや北西ドイツ）では、俗人たちの信仰と観想修道制の枠組が共存し、シトー会が強い影響力を有した。一三世紀後半には、修道院の環境から高い教養を持つ女性神秘家が輩出され、自ら神秘思想的著作を執筆した。それに対して、イタリアをはじめとする地中海圏では、贖罪運動の活力にも拘らず、神秘体験の言語の広まりは遅れたし、高度な思想的展開も限定的であった。[50] バルトロメイ・ロマニョーリは、このズレをもたらす後者側の要因として、女性の社会的自立性の不在に加えて、一二世紀以前における女子修道院の未整備、女性たちが独自の文化を生み出すためには強すぎた托鉢修道会の影響力、ビッツォキなどの信仰形態の細分化された展開などを挙げている。また、彼女は、北西部ヨーロッパの修道制における「禁域化」の進行と女性たちの隔離が、学問への集中や識字力の向上をもたらしたことを指摘する。イタリアでも、禁域化された十五世紀以後のキアラ会修道女たちは高い識字力と教養を持ち、多くのテキストを生産するのである。[51] また、一三世紀後半のイタリアで托鉢修道会士が執筆した女性聖人の伝記は、その登場が遅れたゆえに、新たな段階の到来を記録している。「神秘体験の言語」に対する疑念が既に増大しているため、既に神秘家たちには自己防衛の必要が生じていたのである。[52] 至福直観や自由心霊派の問題が浮上すると、聖人伝作者たちは、神秘体験のカリスマと聖職位階制の権威の間に断絶が存在しないことを示す任務を負うことになる。[53] しかし、一三一〇年のマルグリット・ポレートの火刑によって、「神秘家たちの教会と制度の教会の谷間は拡大していく」のである。[54]

第八章「霊的指導における男女間関係」（イザベッラ・ガリャルディ）は、「霊的指導 Direzione spirituale」という場および実践による社会的規範の形成を、一二～一六世紀の司牧的史料によりながら、さらに男性による女性の指導という形態に絞って論じている。[55] ガリャルディによれば、霊的指導は教育と道徳化の古来の形態であり、個人的・集団的価値観の形成過程や、社会的慣習の構築と流布において教会が果たした役割を理解するために重要な主題となる。[56] 一二一五年の第四ラテラノ公会議における信徒の告解義務化は、中世における司牧史の転換点として重視されているが、一二世紀後半に広く読まれた贖罪手引書では、告解は常に贖罪の全実践過程の一段階として、そして聴罪者と告白者の共同作業として理解されていた。[57] 一三世紀以後に聴罪者の役割を引き受ける托鉢修道会士たちも、告解を完結した実践とは捉えず、説教や教育と結びつく幅広い霊的指導の一部として捉える発想を継承した。聴罪者と告白者の関係は、修道制的な「霊的な父」の転

化の結果として、キリストにおける教師と弟子ないし父と子の関係として表象・理解された。こうした事例の中で最もよく知られているのは、聴罪者／聖職者と「聖人」の関係であるが、その場合には師弟関係は形式的で、むしろカテリーナ・ダ・シエーナのような「生ける聖女」の側が霊的な指導者となった[58]。信徒の行いを確認し、識別し、修正する指導者の役割は、告解における聴罪者の場合でも、時には俗人によって引き受けられた[59]。女性に対する霊的指導において最も重要なテーマとなるのは、夫婦の関係であった。ガリャルディは、ジョヴァンニ・ドミニチやトンマーゾ・カッファリーニのようなドメニコ会士の著作をとりあげ、そこでは修道制的な中庸の美徳や俗世からの内面的隠遁が説かれていることを指摘する[60]。全体として、ガリャルディが強調しているのは、霊的指導が信徒の「内面」の秩序化を推進し、服従という社会的価値に基づいた良心の構築に貢献したことである[61]。

第九章「オン・ザ・ロード：中世における女性の福音説教」（マリーナ・ベネデッティ）は、中世の「異端」運動における女性たちの活動を紹介する[62]。ベネデッティによれば、古代から近代へ至るキリスト教会の歴史は、女性たちの排除の歴史であった。イエスのもとには説教者マグダラのマリアがおり、救世主の受難と復活を目撃したにも拘らず、後の教会人たちはその記憶を抹消・変形し、女性から文化的・社会的・宗教的・法的役割を剥奪した。しかし、新約聖書に残されたイエス本来の教えの痕跡に惹かれた中世の女性信徒は、聖書への回帰によって「なされなかった／失敗した革命 rivoluzione mancata」を遂行しようと、福音説教を始めたのである[63]。ベネデッティは、その例としてヴァルド派とアポストリをとりあげる。リヨンのヴァルドは、おそらく女性に関する特定の教説を持たなかった[64]。しかし、多くの女性達が彼のメッセージに惹きつけられて、その運動に参加した[65]。十分な史料は残されていないものの、一二世紀末から一五世紀末まで、ヴァルド派の女性たちは遍歴説教を行い、バルバと呼ばれる指導者の育成にも関与し続けたようである[66]。一五世紀なかばになると、多くのヴァルド派が潜伏していたアルプス地方では、女性遍歴説教者の存在が「魔女の飛行」のトポスへ結びついていく[67]。アポストリに関しても、その活動への女性たちの参加が、最初期から記録されている[68]。ベネデッティは、おそらく遍歴説教を行っていたアポストリ女性説教者の誘拐事件を引用して、彼女たちを取り巻いていた危険を論じる[69]。ヴァルド派の場合にも、セガレッリ期アポストリの場合にも、そしてドルチーノ・ダ・ノヴァーラと活動をともにしたマルゲリータ・ダ・トレントの場合にも共通しているのは、おそらくイエスとマグダラのマリアを模範とした男性指導者と霊的な姉妹の関係が、教会人の言説においては性的な放埒・逸脱と結び付けられることである[70]。

第十章「女性の霊的生活における図像の機能」（ミケーレ・バッチ）は、本論集において唯一の美術史からの論考である[71]。とはいえ、イタリア宗教史研究において文献史学と美術史学は決して切り離されたものではなく、本章の主題は両分野にまたがる豊富な研究蓄積を有する[72]。中世においても、図像と神秘体験は両義的な関係を有していた。すなわち、神秘体験が「肉体的な眼では見ることができないものを、心の目で見る」のだとすれば、物質的な図像はその妨げになるとも考えられる[73]。他方で、一三～一四世紀

の聖人伝的著作の多くは、観想者として知られる女性の信仰実践において図像が果たした役割を強調している。一方では、図像が観想や神秘体験を導入する手がかりとなった。他方では、図像を中心とする空間は、「芸術的な楽しみは取るに足りないとしても」精神的な避難場所として機能した[74]。また、図像を前にした祈りや苦行は、表象された聖なる存在と交流する手段であり、しばしば図像は「ヒエロファニー的」な神性顕現の場となり、サン・ダミアーノの高名な磔刑像のように「命を吹き込まれた」。多くの聖人伝作者が、図像を媒介とする体験と完全な神秘体験の差異を明示し、前者の優越を強調しているとはいえ、両者のあいだには並行的な相互関係が存在し、後者によって前者の意味が失われることはなかったのである。幻視・啓示の具体的な内容においても、図像表現とのあいだに緊張関係は存在した。図像が与える慣習的な枠組が幻視体験にとって不可欠である一方、心の目が見るイメージは、その枠組を超えていく傾向にあった。この幻視と図像の関係を示す最も興味深いエピソードとして、スウェーデンのビルギッタの幻視がキリスト降誕の図像表現を刷新したことが指摘される。聖地巡礼に赴いたビルギッタが、それ以前には描かれたことのなかった場面を幻視したことがきっかけで、地面に置かれた幼子イエスに祈るマリアという新たな主題が現れたのである[75]。

第十一章「南イタリアにおける女性たちの宗教的諸経験」（ロザルバ・ディ・メッリョ）は、中部イタリアやロンバルディアに比べて本邦では紹介されてこなかった、半島南部における女性の問題を扱う[76]。同地域の信仰生活の枠組は、一三世紀なかばに托鉢修道会が「侵入」するまでベネディクトゥス系修道制とイタロ＝グレコ修道制によって規定されており、他地域からの影響を被ることが比較的少なかった[77]。とはいえ、その内実は決して静態的なものではなく、地域ごとにも大きな差異が存在した。残念ながら史料状況は良好とはいえず、慣習律や規定、叙階の記録といった教会の法制史料は極めて手薄であって、分析にあたっては聖人伝的史料や死者追祷記録、公証人文書など他の類型に依拠することになる。ディ＝メッリョは、サンタ・マリア・ディ・プルサーノ修道院（ガルガーノ）の創設者ジョヴァンニ・ディ・マテーラおよびモンテヴェルジネ大修道院の創設者グリエルモ・ダ・ヴェルチェッリの伝記で言及された、伝統的修道制の枠内における女性共同体の姿を指摘する[78]。次いで、叙述の焦点は一三世紀の各都市で出現した「新しい信仰」へと移動する。ここでも、ベネヴェントを除くと史料は散発的・断片的であり、北中部イタリアと同じくインカルチェラータやエレミタという語彙で示される女性が存在したとしても、その実像を十分に明らかにすることは難しい。とはいえ、これは南イタリアにおける「新しい信仰」の制度化が著しく遅れたことが原因であって、現象自体の周縁性に由来するものではないと思われる。ディ＝メッリョによれば、南イタリアでは、伝統的な要素と他地域から取り入れられた要素が共存し、女性の信仰生活が複合的かつ豊かに展開したという。

第十二章「一三～一四世紀トスカーナにおける女性的宗教心の諸経験と都市的側面：シエーナの事例から出発して」（ミケーレ・ペッレグリーニ）は、信仰生活を構成する個々の要素や類型から離れて、それらが展開された都市社会という場に注視し、総

体的な把握を試みる。[79] ペッレグリーニは、史料上の制約や「新しい信仰」の多様性・流動性に起因する困難を指摘しつつも、彼自身の研究フィールドであるシエーナの事例を簡潔に紹介してくれる。[80] 彼によれば、一三～一四世紀の信仰生活の枠組は、第一にコンタードにあった女子修道院の「都市化 Inurbamento」、第二に都市内部固有の信仰形態の成長である。具体的な詳細の紹介はここでは控えるものの、ペッレグリーニによる次の方法論的指摘は傾聴に値する。「これまでの研究は、しばしば（特定の共同体の）法的性格や戒律の遵守やカリスマ的な啓示のうちに長く証明しづらい連続性を措定することによって、その固有の特徴を通時的に追跡してきた」。それに対して都市という文脈の設定は、法や遺言といった「共同体の起源やそれらが育んできた固有の特徴には注意を払わないとしても、彼らの公的側面が露わになる瞬間を正確に写し取ることのできる」史料に依拠する、共時的な再構成を要請する。[81] ペッレグリーニによれば、こうした「外部からの認識」において、「新しい信仰」は伝統的修道制に類似しているとまで言わないまでも、機能面に置いて吸収されうる。実際に、一三～一四世紀シエーナにおいて女性の信仰生活の参照枠となり続けたのは、サンタ・ペトロニッラとサン・プロスペロというキアラ会・シトー会の両修道院であった。[82]

第十三章「一三～一四世紀ピストイアの聖俗権力と女性の宗教経験」（ピエロ・グアルティエーリ）は、ペッレグリーニが論じる都市という枠組に基づいた論考である。[83] グアルティエーリは、一三世紀初頭から一三七八年までの都市ピストイアにおける、女性たちの「戒律化」された信仰共同体（修道院および托鉢修道会傘下）を、都市の政治的・社会的環境の中に位置づける。本章に関しても詳細は省略するが、対象設定が示すように、一三世紀以降においても伝統的な修道制が果たす役割が顕著であったことが伺える。そしてグアルティエーリによれば、戒律を与えられて秩序立てられた制度の内部にあっても、女性たちは自身の宗教性を発露する場を見つけ出すことができたのだ、という。[84]

第十四章「家族の家と信仰の家のあいだで：一三～一五世紀の女性たちが生きた経験」（アンナ・エスポージト）は、一三～一五世紀ローマを舞台として女性たちが形成した信仰共同体を概観している。[85]「新しい信仰」に従事する女性たちは、戒律を採用することはなかったとしても、しばしば特定の家屋で共同生活を送った。[86] 彼女たちの多くは人数制限等の問題で修道院に入ることができない、あるいは俗世での活動を求める結果として、贖罪者の生活を唯一の選択肢として選んだ。それら共同体の多くは流動的かつ一時的なもので、それゆえ史料にも残りづらいものの、中世後期の女性たちの信仰生活においては基本的な枠組を提供したのである。彼女たちの多くは托鉢修道会士の司牧を受けたものの、霊的指導の選択肢は幅広く、在俗聖職者や観想修道士、兄弟会のメンバーがその任を引き受けることも珍しくはなかった。この、教会法上では曖昧な地位を保ち、[87] 出入りや加入・脱退が緩やかな共同体を、エスポージトは「開かれた修道院」と呼ぶ。実際、これらの共同体に属する女性たちは、例えば財産所有についてはかなりの自由を享受していたし（彼女たちは服従と貞節の誓願は立てていても、清貧のそれは課せられていなかった）、慈善活動等を通じて外部との交流を保っていた。そしてエスポージトによれ

ば、外部と結びつきを保ちつつ固有の信仰実践を擁護するため、彼女たちは教皇の保護を求めたのだという。[88]

第十五章「女性たちの宗教心と遺言での選択」（マリア・クララ・ロッシ）は、後期中世に増大する遺言史料の内容から、当時の女性たちの信仰生活の特徴を読み解こうと試みる。[89] イタリア半島では、一三世紀から一五世紀にかけて女性による遺言記録の残存件数が増大しており、幾つかの都市では男性のそれを凌駕するに至っている。遺言をめぐる地域差が生じる背景としては、各都市による相続慣習や婚姻戦略の差異が想定されているものの、その本格的な解明はなされていない。[90] とはいえ、ロッシによれば、中世における「遺言」という行為は、基本的には信仰実践の一環であった。遺言の専門家たち――公証人・教会法学者・修辞教師、そして托鉢修道会士たちは、いずれも遺言を「良き死」の準備とみなし、遺贈などを通じた善行を説いた。その不履行は、教会法上の問題となった。実際に、女性たちの遺言の中には無数の敬虔な遺贈が含まれている。ロッシは、遺言史料には「女性的」特徴として、①極端なヒロイズムに走らない、②キリストの理想からかけ離れているとされた聖職位階制への反発、という中道的宗教心が現れていると主張し、そうした心性が育まれた場として以下の六つを挙げる。兄弟会的連帯、托鉢修道会による司牧、読書を通じた個人的な祈り、教会通いと典礼、巡礼、そして小規模な共同生活である。これら六種類の場は、遺贈対象となったり、あるいは関連する品物（祈りと関わる書物など）が遺品となったりすることで、遺言中に言及されているという。

課題と展望

すでに述べたように、本書の最大の意義は、イタリア中世における女性の信仰生活という主題に関する研究を牽引してきた、あるいは今後牽引していくであろう歴史家たちが、それぞれが取り組むテーマの概説を提示しており、優れた入門書ないし出発点となりうる点にある。したがって、個々の論考の内容や歴史観に対する立ち入った批評・批判は、本書の一章ではなくそれぞれの主著を対象として、異なる場において行うべきであろう。また、本書には取り上げられていないテーマも幾つか存在する。例えば、女性と音楽の関係、正教会・ユダヤ・イスラームとの比較・交流・関係史の視点などが直ちに思い浮かぶ。しかし、研究集会に基づいた論集である本書は（いかに概説・入門としての性格を備えているとしても）教科書ではないのだから、網羅性の欠如を取り上げてあげつらうべきではないだろう。[91]

第一に触れたいのは、本論集全体を通じて、一三世紀以降の信仰生活における伝統的な観想修道制の役割に大きな注目が集まっていることである。古典的な修道制史叙述では、クリュニーからシトー、そして托鉢修道会という一種の発展史観が採用されることが多く、「全盛期」を過ぎたとされる修道会は、その後の時代には後景に退くことがしばしば見られた。特に一三世紀を境とした農村の観想修道会から都市の托鉢修道会への「主役交代」という枠組には大きな拘束力があり、後期中世のベネディクト会やシトー会の活動に大きな注目が集まることはなかった。それに対して二十世紀末になると、一方では托鉢修道会の「都市性」が相対

化され、他方では観想修道会士たちが都市空間や都市・農村関係史において果たした役割に新たな光が当てられた。[92] また、ガリャルディ論考から読み取れるように、修道制の知的・精神的遺産と近世の「規律化」の関係についても長期持続ないし枠組・概念の再編・転用という観点から再検証が進んでいる。[93]

第二に、世代の異なる研究者による論集という形態を採ったために、本書にはイタリア中世宗教史全体に共通する動向が図らずも映し出されている。

一九七〇年代末から研究をスタートさせた世代（アルベルツォーニ、ベンヴェヌーティ、バローネ、エスポージト）は、女性たちの活動・実践・生活形態の多様性や教皇の政策の非一貫性・柔軟性を強調しつつも、一方で聖職位階制と女性たちの「新しい信仰」という二項対立、他方で一三～一四世紀転換期における両者の関係の決定的変化、という時系列を採用している。この枠組は、二十世紀初頭にジョアッキーノ・ヴォルペが提示し、ラッファエッロ・モルゲン、ラウル・マンセッリ、ジョヴァンニ・ミッコリらが継承・洗練してきたイタリア宗教史の古典学説と共通のものである。[94] 使用される分析概念や語彙、評価基準などの点からしても、二十世紀末までの女性史研究が描く中世宗教史像は、古典学説の換骨奪胎――「聖職位階制と俗人・民衆」の対立項を「聖職位階制＝男性と女性」へ入れ替えたもの、という性格が色濃く現れている。[95]

それに対して、一九九〇年代以降に出現する世代の研究者たち（ラーヴァ、アンデンナ、ガッツィーニ、ガリャルディ、ペッレグリーニ）には、そうした二項対立的・図式的な解釈は不在である。[96] 聖職位階制による制度化・戒律化や霊的指導は、以前の世代のようにネガティヴに評価されるばかりではなく、その内部で働いたダイナミズムが詳細に解明される。[97] 托鉢修道会は、俗人・女性の信仰生活に侵入してくる異質な外部者ではなく、その重要な構成要素（ただし、一アクターに過ぎない）である。また、「霊性」に基づいた構造的把握や「宗教運動」論に代わって、言説と実践が関心の対象に浮上し、論じられるテーマも多様化した。本書に寄稿しているとはいえ、彼ら／彼女らは必ずしも「女性史」研究者ではないのである。

しかし、この枠組と対象の連動的変化が生み出した盲点の存在を、本書ははからずも浮かび上がらせている。イタリア中世宗教史研究において、古典的な学説の相対化は、その中心的主題だった「異端者」や聖人、「霊性」とは異なる研究対象（例えば異端審問、兄弟会、慈善活動、教育など）を通じてなされた。そのため、新たな枠組と旧来の学説の間には補完的な棲み分けが成立してしまい、伝統的な研究領域では古典的枠組が無批判に温存されるという事態が生じたのである。[98] 新世代に属するはずのベネデッティとバルトロメイ・ロマニョーリの論考において、この問題は明らかであろう。もちろん両者の研究は決して古色蒼然たるものではなく、いずれも古典学説には欠けていた史料論・文献学的知見や国際比較の視点を導入し、前者は一五世紀、後者は一七世紀までを射程に収めるなど、独自の時代区分をも提出している。それにもかかわらず一九世紀末から二十世紀初頭に成立した二項対立的構造は温存・再生産されており、特に後者は一三～一四世紀転換期における断絶を再度取り上げているのである。[99]

こうした枠組と対象の変化、そして研究の進化に伴う盲点の出現は、一九九〇年代末にはじまるイタリア中世宗教史研究全体の動向を反映している[100]。もちろん、ヴォルペからミッコリへ至る研究者たちが構築してきた古典学説は多くの長所を有していたし、特に巨視的・構造的な歴史把握と明快な図式という点では現在でも多くの読者を引きつける力を持つ。彼らが同時代の文明に対して抱いていた強い問題意識がもたらす、叙述そのものの魅力については言うまでもない。しかし、そうした長所が歴史像の単純化・平板化の産物であり、しばしば実証性を欠く大風呂敷であった点も否定はできず、その完全な克服は現在でも急務となっている[101]。「女性の信仰生活」についても、「異端者」や「神秘体験者」といった伝統的な主題と接続する領域において古典的枠組を乗り越えることが必要ではないだろうか[102]。

このように批判めいたことを述べるとしても、本論集が優れた導入として有する価値に変わりはない。二十世紀後半に飛躍的に進展し、近年にも大きな広がりを見せているテーマをめぐる最新の研究状況の紹介として、あるいは参照・批判のための準拠枠として、多くの人に読まれることを望みたい[103]。

Mauro RONZANI, *Introduzione*
Maria Pia ALBERZONI, *"Regulariter vivere": le nuove forme duecentesche di monachesimo femminile*
Anna BENVENUTI, *Percorsi di vita attraverso le fonti agiografiche*
Eleonora RAVA, *Il fenomeno della reclusione: esperienze italiane ed europee*
Cristina ANDENNA, *Il fenomeno delle "convertite" fra Italia e Europa*
Giulia BARONE, *Scelte della Chiesa e delle Chiese: il Papato e l'episcopato di fronte alla vita religiosa femminile nel Due e Trecento*
Marina GAZZINI, *Vite femminili negli ospedali medievali tra religiosità e assistenza (Italia centro-settentrionale)*
Alessandra BARTOLOMEI ROMAGNOLI, *Il silenzio e la parola nella mistica femminile*
Isabella GAGLIARDI, *Il rapporto uomo donna e la direzione spirituale*
Marina BENEDETTI, *On the road. La predicazione apostolica femminile nel Medioevo*
Michele BACCI, *Funzioni delle immagini nella vita spirituale femminile*
Rosalba DI MEGLIO, *Esperienze religiose femminili nell'Italia meridionale*
Michele PELLEGRINI, *Esperienze della religiosità femminile in Toscana*
Piero GUALTIERI, *Poteri civili ed ecclesiastici ed esperienze religiose femminili a Pistoia fra Due e Trecento*
Anna ESPOSITO, *Fra casa di famiglia e "casa" religiosa: esperienze femminili vissute fra Due e Quattrocento*
Maria Clara ROSSI, *Religiosità e scelte testamentarie femminili*
Sofia BOESCH GAJANO, *Conclusioni*

注

（1）中世初期の女性については、研究入門として Tiziana Lazzari, *Le donne nell'alto Medioevo* (Milan: Bruno Mondadori, 2010)

を参照。中世全体に関するより広範な入門書は、Judith M Bennett and Ruth Mazo Karras (eds.), *The Oxford Handbook of Women and Gender in Medieval Europe* (Oxford: Oxford University Press, 2013). イタリア宗教史における女性に関する通史としては、やや古典的だが、Lucetta Scaraffia and Gabriella Zarri (eds.), *Donne e fede: santità e vita religiosa in Italia* (Roma: Laterza, 1994) が優れている。英訳は、Lucetta Scaraffia and Gabriella Zarri (eds.), *Women and Faith: Catholic Religious Life in Italy from Late Antiquity to the Present*, trans. Keith Botsford (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1999).

（2）一二世紀より始まる信仰形態の刷新は、伝統的に「宗教運動 Movimenti religiosi」と呼ばれてきた。しかし、近年のイタリア史学は、何らかの統一的な綱領や組織、志向性を想像させる「運動」という語が誤解を招くとして、修道制を模範として聖俗両身分のあいだに広まった新しい「信仰生活／信仰形態／信仰実践」を総称する新たな分析概念として、*Religiones novae* を採用している（本書 p. 2）。筆者は「新しい信仰」という訳語を用いている。

（3）筆者は、いわゆる後期中世の「神秘体験者 Mystics」に対して「預言者」という分析概念を用いての接近を試みているものの、本書では「神秘家／神秘体験者／神秘思想家 Mistiche/mistici」が用いられている。そのため、内容紹介については、その語法を踏襲する。

（4）イタリアの史学史一般における「女性／ジェンダー」の問題については、Teresa Bertilotti (ed.), *Women's History at the Cutting Edge: An Italian Perspective* (Roma: Viella, 2020). が、「男性」性に関する章も収録されており、有益である。日本語では、勝田由美「一九世紀末から二十世紀初頭のイタリア女性運動」、『一橋論叢』第一一〇巻（一九九三年）、六〇〇－六一二頁；菊川麻里「イタリア近代女性運動史の視座」、『現代史研究』第四八巻（二〇〇三年）、二一～三五頁；同「性差から歴史を語る：イタリアにおける女性史と『ジェンダー』」、姫岡とし子他著『近代ヨーロッパの探究⑪ジェンダー』（ミネルヴァ書房、二〇〇八年）、三〇一～三〇八頁を参照。

（5）イタリア中世宗教史研究については、白川太郎「イタリア中世宗教史研究の基本的枠組：宗教運動論の成果と課題」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六五輯（二〇一九年）、四九九～五一三頁を、イタリア史学史一般は、Giuseppe Galasso, *Storia della storiografia italiana: un profilo* (Bari: Laterza, 2017) を参照。また、Roberto Pertici, *La cultura storica dell'Italia unita: saggi e interventi critici* (Roma: Viella, 2018) のヴォルペおよびミッコリに関する章も有益。

（6）一般に「女性解放運動」の語は、英米圏における第二波フェミニズムである Women's Liberation Movement の訳語として用いられる。しかし、イタリア史研究の場合には、マッツィーニの影響を受けつつ広まった一九世紀後半から二十世紀初頭の運動を（分析概念として）「女性解放運動／主義」emancipazionismo femminile などと呼称している。本稿で

は、イタリア独自の文脈に重きをおくため、後者の用例に従って「女性解放」の用語を使用する。

（7）なお、他地域に関しては、舟橋倫子（低地地方）、三浦麻美（ドイツ）、森下園・久木田直江（イングランド）らによる優れた研究や紹介がある。

（8）一例として、池上俊一『中世ヨーロッパの宗教運動』（名古屋大学出版会、二〇〇七年）。

（9）白川太郎「『聖マルゲリータ・ダ・コルトーナ』の誕生：後期中世イタリア都市における神秘体験者・崇敬・表象」、『比較都市史研究』第三八巻（二〇一九年）、一七～四三頁；同「グリエルマとマイフレーダの異端：一三世紀末ミラノにおける信仰・政治・社会」『西洋史学』第二七一号（二〇二一年）、一～二一頁；同「故郷における預言者：キアラ・ダ・モンテファルコをめぐる崇敬・対立・権力」、『西洋中世研究』第一三号（二〇二一年）、七九～九九頁をあわせて参照。これまでの論考では明確に言語化することができなかったが、筆者が預言者研究の基本的な分析枠として設定しているのは、「制度的／カリスマ的」な権威・権力および「霊的指導者／被司牧者」の関係であって、ジェンダーは人的結合・実践・表象のあり方を規定する無数の要素のひとつと捉えている（上記の対立項が後期中世において完全にジェンダー化されていたとは考えていない）。ただし、現在取り組んでいる預言者表象の研究には、女性史ではないまでも、ジェンダーの視角を補助的に導入しようと試みている。

（10）当然ながら、中世における女性の信仰生活という主題をめぐる歴史学的営みは、対象においても研究においても、現在の国境には縛られないはずである。しかし、一方ではイタリアのナショナル・ヒストリーと結びついて成立した宗教史研究の枠組が、他方ではイタリアの事例への傾注が、歴史的・史学史的に固有の「イタリア中世宗教史研究における女性」の主題・研究史を成立させているのも間違いがない。本書においても、アンデンナやバルトロメイ・ロマニョーリ、ベネデッティの論考が全ヨーロッパ規模に考察を広げ、アルベルツォーニとバローネが教皇庁という普遍的権威を扱い、ラーヴァが比較研究のプロジェクトを紹介するにも拘らず、その「イタリア」的性格は顕著である。そのため、ここでは敢えて二重の意味での「イタリア史学」の一環としての紹介に徹する。他地域や異なる時代を専門とする研究者であれば、筆者とは異なる読みも可能だろう。

（11）女性史を専門としない筆者があえて二冊目以降を挙げるとするならば、以下の論集がいずれも優れた手引となる。Scaraffia and Zarri, *Donne e fede*; Daniel Bornstein and Roberto Rusconi (eds.), *Women and Religion in Medieval and Renaissance Italy* (Chicago: University of Chicago Press, 1996); Gabriella Zarri (ed.), *Il monachesimo femminile in Italia dall'alto medioevo al secolo XVII: a confronto con l'oggi*; atti del VI convegno del "Centro di Studi Farfensi", Santa Vittoria in Matenano 21-24 settembre 1995 (Verona: Il Segno dei Gabrielli ed., 1997); Anna Benvenuti Papi, "*In castro poenitentiae*": *santità e società femminile nell'Italia*

medievale (Roma: Herder, 1990); Mario Sensi, *Storie di bizzoche tra Umbria e Marche* (Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 1995); Id., *Mulieres in Ecclesia: storie di monache e bizzoche* (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'Alto Medioevo, 2010).

(12) Mauro Ronzani, "Introduzione", *Vita religiosa al femminile (secoli XIII-XIV)*: ventiseiesimo Convegno internazionale di studi, Pistoia, 19-21 maggio 2017 (Roma: Viella, 2019), 1–11. あわせて、Alessandra Bartolomei Romagnoli, "Donne e uomini che scrivono di donne", *Quaderni di storia religiosa medievale*, 22:1 (2019), 143–68 を参照。

(13) 近世イタリアにおける聖人伝的史料の編纂・校訂および書き直し作業については、Gennaro Luongo (ed.), *Erudizione e devozione: le raccolte di vite di santi in eta moderna e contemporanea* (Roma: Viella, 2000); Tommaso Caliò, Maria Duranti and Raimondo Michetti (eds.), *Italia sacra. Le raccolte di vite dei santi e l'inventio delle regioni (secc. XV-XVIII)* (Roma: Viella, 2014).

(14) 具体的な文献等は、白川太郎「グリエルマと「聖霊の子」：研究史的試論」『西洋史論叢』第四一号（二〇一九年）、五七～七二頁を参照。この「異端」に対する筆者の見解は、前掲拙稿「グリエルマとマイフレーダの異端」を参照。なお、同じ女性の「異端者」であっても、ドルチーノ・ダ・ノヴァーラのパートナーとされたマルゲリータ・ダ・トレントは、悲劇のヒロイン視される傾向にあった。Marina Benedetti, "Margherita "la bella"?: la costruzione di un'immagine tra storia e letteratura", *Studi medievali*, 50 (2009), 105–31.

(15) Gabriella Zarri, "Caterina Benincasa tra Siena e l'Europa", in Alessandra Bartolomei Romagnoli, Luciano Cinelli and Pierantonio Piatti (eds.), *Virgo digna coelo: Caterina e la sua eredità: raccolta di studi in occasione del 550° anniversario della canonizzazione di santa Caterina da Siena (1461-2011)* (Città del Vaticano: Libreria Editrice Vaticana, 2013), 27–46.

(16) ＣＣでは二〇一〇年の新版を参照（原著は一九〇七年の論文をもとに、一九二二年に出版）。Gioacchino Volpe, *Movimenti religiosi e sette ereticali nella società medievale italiana: secoli XI-XIV*, Rep. (Roma: Donzelli, 2010). ヴォルペの中世史研究については、Cinzio Violante, *Gioacchino Volpe medievista* (Brescia: Morcelliana, 2017) をあわせて参照。

(17) Gilles Gérard Meersseman, *Dossier de l'Ordre de la pénitence au XIIIe siècle*, 2nd ed. (Fribourg: Editions universitaires, 1982); Attilio Bartoli Langeli, "I Penitenti a Spoleto nel Duecento", *Collectanea Franciscana*, 44 (1973), 303–30; Fausta Casolini, "I Penitenti francescani in "Leggende" e cronache del trecento", *I frati penitenti di san Francesco nella società del Due e Trecento*: atti del 2. Convegno di studi francescani, Roma, 12-13-14 ottobre 1976 (Roma: Istituto storico dei cappuccini, 1977), 69–86.

(18) Herbert Grundmann, *Religiöse Bewegungen im Mittelalter;*

Untersuchungen über die geschichtlichen Zusammenhänge zwischen der Ketzerei, den Bettelorden und der religiösen Frauenbewegung im 12. und 13. Jahrhundert und über die geschichtlichen Grundlagen der deutschen Mystik (Berlin: Ebering, 1935).

(19) 一例として、小澤実「西洋中世の民衆宗教運動：グルントマン以降」、『クリオ』二二二号別冊（二〇〇八年）九～一七頁。イタリア史学に軸足を置く筆者の立場からすると、グルントマンを中心とする小澤の整理は、大陸圏の研究史を一本のナラティヴで語ろうとするためか、国際的な研究の並行性・相互影響と各国独自の継承・系譜の比重が前者に偏りすぎている。とりわけ、①グルントマン以前に展開されていたイタリア・フランス等の研究をカトリック史家の業績に限定し、プロテスタント系やカトリック近代主義者の貢献を見落としており、その結果として②アナール派や社会構造史のインパクトを過剰に評価している、という不満がある。その結果として、逆説的にグルントマンやアナール派本来の功績（それが大であることに疑問の余地はない）を埋没させていないだろうか。また、草創期の宗教史研究者の多くは中世史家であると同時に近世史家・近代史家であって、中世史の業績のみを手がかりとした研究史整理には限界があると思われてならない（小澤の前掲稿はこの点には配慮がある）。

(20) その手がかりとして、小田内隆「〈民衆異端〉パラダイムの再検討：二項対立を越えて」『立命館文学』第五九七巻（二〇〇七年）、三四～四九頁を参照。

(21) 研究史の回顧としては、Mario Sensi, "Le recluse nell'Italia di mezzo (secc. XIII e XV)", *Mulieres in Ecclesia: storie di monache e bizzoche* (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'Alto Medioevo, 2010), 3–70; Bartolomei Romagnoli, "Donne e uomini che scrivono di donne" が幸便。女性史に限らなければ、Giovanna Casagrande, "Il movimento penitenziale francescano nel dibattito storiografico degli ultimi 25 anni", *Santi e santità nel movimento penitenziale francescano dal Duecento al Cinquecento*: Atti del Convegno di Studi Francescani: Assisi, 11-12 febbraio 1998 (Roma: Franciscanum, 1998), 351–89; Alessandra Bartolomei Romagnoli, "I movimenti penitenziali alla fine del Medioevo come problema storiografico", *Chiesa e storia*, 6/7 (2016), 23–56. 重要な著作および研究集会報告集は、André Vauchez, *La sainteté en Occident aux derniers siècles du Moyen Age*: d'après les procès de canonisation et les documents hagiographiques (Roma: École française de Rome, 1981); *S. Chiara da Montefalco e il suo tempo*: Atti del 4. Convegno di studi storici ecclesiastici organizzato dall'Archidiocesi di Spoleto: Spoleto, 28-30 dicembre 1981 (Firenze: La Nuova Italia, 1985); *Una santa, una città*: atti del Convegno storico nel 5. centenario della venuta a Perugia di Colomba da Rieti: Perugia, 10-11-12 novembre 1989 (Spoleto: Fondazione Centro italiano di

Vita religiosa al femminile (secoli XIII-XIV), Roma: Viella, 2019.

studi sull'Alto Medioevo, 1991); *Angela da Foligno terziaria francescana*: Atti del Convegno storico nel 7. centenario dell'ingresso della beata Angela da Foligno nell'Ordine francescano secolare (1291-1991): Foligno, 17-18 19 novembre 1991 (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'Alto Medioevo, 1992) など。

（22）Sensi, *Storie di bizzoche*; Id. *Mulieres in Ecclesia*; Giovanna Casagrande, *Religiosità penitenziale e città al tempo dei comuni* (Roma: Istituto Storico dei Cappuccini, 1995).

（23）後者との関連については、Dinora Corsi (ed.), *Donne cristiane e sacerdozio: dalle origini all'et?? contemporanea* (Roma: Viella, 2006).

（24）本書 p. 31.

（25）アルベルツォーニは、サクロ・クオーレ・カトリック大学教授。ミラーノを研究フィールドとしており、同市におけるウミリアーティやフランチェスコ会、贖罪運動研究の第一人者である。また、キアラ・ダッシージ研究についても知られている。主な著作と論考は、Maria Pia Alberzoni, *Francescanesimo a Milano nel Duecento* (Milano: Biblioteca francescana, 1991); Ead., *Chiara e il papato* (Milano: Biblioteca francescana, 1995); Ead., "Chiara di Assisi e il francescanesimo femminile", *Francesco d'Assisi e il primo secolo di storia francescana* (Torino: Einaudi, 1997), 203–35; Ead., "Papato e nuovi Ordini religiosi femminili", *Il Papato duecentesco e gli ordini mendicanti*: atti del XXV Convegno internazionale: Assisi, 13-14 febbraio 1998 (Spoleto: Centro Italiano di Studi Sull'Alto Medioevo, 1998), 205–61 など。

（26）初期中世から一三世紀初頭までの女子修道院については、Jean Leclercq, "Il monachesimo femminile nei secoli XII e XIII", *Movimento religioso femminile e Francescanesimo nel secolo XIII*: Atti del 7 Convegno internazionale: Assisi, 11-13 ottobre 1979 (Assisi: Società internazionale di studi francescani, 1980), 61–99; Veronica West-Harling, "Female monasticism in Italy in the Early Middle Ages: new questions, new debates", *Reti medievali*, 20 (2019), 329–52 などを参照。

（27）戒律なき律修生活というテーマについては、Kaspar Elm, "Vita regularis sine regula. Bedeutung, Rechtsstellung und Selbstverständnis des mittelalterlichen und frühneuzeitlichen Semireligiosentums", in Frantisek Smahel and Elisabeth Müller-Luckner (eds.), *Häresie und vorzeitige Reformation im Spätmittelalter* (München: R. Oldenbourg, 1998), 239–73 が概説として優れている。英訳は、Kaspar Elm, "Vita regularis sine regula. The Meaning, Legal Status and Self-Understanding of Late-Medieval and Earry-Modern Semi-Religious Life", in James D. Mixson (ed.), *Religious life between Jerusalem, the desert, and the world: selected essays by Kaspar Elm* (Leiden: Brill, 2016), 277–316.

（28）教皇権による女性の「新しい信仰」制度化の過程につい

ては、以下の諸研究を参照。Edith Pásztor, "I papi del Duecento e Trecento di fronte alla vita religiosa femminile", *Il movimento religioso femminile in Umbria nei secoli XIII-XIV*: Atti del convegno internazionale di studio nell'ambito delle celebrazioni per l'VIII centenario della nascita di S. Francesco d'Assisi: Città di Castello, 27-28-29 ottobre 1982 (Firenze: La Nuova Italia, 1984), 29–65; Alberzoni, "Papato e nuovi Ordini religiosi femminili"; Sensi, *Mulieres in Ecclesia*; Alison More, *Fictive Orders and Feminine Religious Identities, 1200-1600* (Oxford: Oxford University Press, 2018).

（29）本書 p. 30.

（30）ベンヴェヌーティはフィレンツェ大学元教授。トスカーナ地方と都市フィレンツェにおける女性の贖罪運動や「聖人」研究に関する権威である。主著は、Benvenuti Papi, *In castro poenitentiae*; Ead., *Sante donne di Toscana: il Medioevo* (Firenze: Sismel Edizioni del Galluzzo, 2018) など。なお、聖人伝的史料から「ライフコース」を抽出する試みとしては、「聖人」として崇敬された対象に限定されてはいるものの、Donald Weinstein and Rudolph M. Bell, *Saints & Society: The Two Worlds of Western Christendom,1000-1700* (Chicago: University of Chicago Press, 1982); Michael Goodich, *Vita Perfecta, the Ideal of Sainthood in the Thirteenth Century* (Stuttgart: Hiersemann, 1982). がある。

（31）いわゆる「市民的宗教」をめぐる議論については以下を参照。André Vauchez (ed.), *La religion civique à l'époque médiévale et moderne (Chrétienté et Islam)*: Actes du colloque organisé par le Centre de recherche "Histoire sociale et culturelle de l'Occident. XIIe-XVIIIe siècle" de l'Université de Paris X-Nanterre et l'Institut universitaire de France (Nanterre, 21-23 juin 1993) (Roma: École française de Rome, 1995); Gabriela Signori, "Religion civique – Patriotisme urbain", *Histoire urbaine*, 27:1 (2010), 9–20; Patrick Boucheron, "Religion Civique, Religion Civile, Religion Séculière: L'ombre d'un doute", *Revue de Synthèse*, 134:2 (2013), 161–83; Giorgio Chittolini, *L'Italia delle civitates: grandi e piccoli centri fra Medioevo e Rinascimento* (Roma: Viella, 2015); Andrew Brown, "Civic religion in late medieval Europe", *Journal of Medieval History*, 42:3 (2016), 338–56. ベンヴェヌーティも、以前の論考では「市民的崇敬」の用語を用いている。Anna Benvenuti Papi, "Culti civici: un confronto europeo", in Sergio Gensini (ed.), *Vita religiosa e identità politiche: universalità e particolarismi nell'Europa del tardo medioevo* (Ospedaletto (Pisa): Pacini, 1998), 181–214; Ead., "La civiltà urbana", *Storia della santità nel cristianesimo occidentale* (Roma: Viella, 2005), 157–222.

（32）この托鉢修道会による聖人伝的史料のプロパガンダ的利用という枠組については、Vauchez, *La sainteté en Occident* を参照。それに対して疑念を呈しているのは、Giulia Barone, "Le proposte agiografiche degli ordini mendicanti tra radicamento locale e dimensione sovranazionale", in Sergio

Gensini (ed.), *Vita religiosa e identità politiche: universalità e particolarismi nell'Europa del tardo medioevo* (Ospedaletto: Pacini, 1998), 163–80.

（33）ラーヴァはセント・アンドルーズ大学名誉研究員。イタリアの中世宗教史研究を今後牽引していくであろう若手のひとりとして注目されている。遺言史料を利用した信仰文化研究およびローザ・ダ・ヴィテルボ関連史料の編纂・研究で知られる他、近年は籠居女性に関する比較研究を進めている。主要な論文として、Eleonora Rava, "Le testataci e le recluse: il fenomeno della reclusione urbana nei testamenti delle donne pisane (secoli XIII-XIV)", in Mariaclara Rossi (ed.), *Margini di libertà: testamenti femminili nel Medioevo*: atti del Convegno internazionale, Verona, 23-25 ottobre 2008 (Verona: Cierre, 2010), 311–32; Ead., "Eremite in città. Il fenomeno della reclusione urbana femminile nell'età comunale: il caso di Pisa", *Revue Mabillon. Ser. NS*, 21 (2010), 139–62; Ead., "Le recluse e il Corpus Domini", *Antonianum*, *89* (2014), 277–99; Ead., "Le 'celle' e frate Elia", *Frate Elia e Cortona. Società e religione nel XIII secolo* (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'Alto Medioevo, 2018), 115–32 などがある。

（34）籠居現象については、イタリアについて、Casagrande, *Religiosità penitenziale e città al tempo dei comuni*, を、現時点での国際的な比較はAnneke B. Mulder-Bakker, *Lives of the Anchoresses: The Rise of the Urban Recluse in Medieval Europe* (Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press, 2005); Liz Herbert McAvoy (ed.), *Anchoritic Traditions of Medieval Europe* (Woodbridge: Boydell Press, 2010) を参照。日本語では、米田潔弘「イタリア」河原温・池上俊一編『ヨーロッパ中近世の兄弟会』東京大学出版会、二〇一四年、二三～七〇頁を参照。

（35）アンデンナは二〇二〇年よりグラーツ大学教授。一一～一二世紀の律修聖堂参事会運動研究から出発し、近年は女性の信仰生活や托鉢修道会のアイデンティティなど、多様なテーマに取り組んでいる。主著・論考は、Cristina Andenna, *Mortariensis Ecclesia: una congregazione di canonici regolari in Italia settentrionale tra XI e XII secolo* (Berlin: Lit, 2007); Ead., "Da moniales novarum penitentium a sorores ordinis Sancte Marie de Valle Viridi. Una forma di vita religiosa femminile fra Oriente e Occidente (secoli XIII-XV)", in Francesco Panarelli (ed.), *Da Accon a Matera Santa Maria la Nova, un monastero femminile tra dimensione mediterranea e identità urbana (XIII-XVI secolo)* (Berlin: Lit, 2012), 59–130; Ead., "Familiäre Nähe und Distanz in der franziskanischen Welt des 13. Jahrhunderts", *Saeculum*, 68:2 (2018), 321–42; Ead., "Canonici Regolari e «mondo» dell'Osservanza. Riflessioni e spunti di ricerca", *Mélanges de l'École française de Rome - Moyen Âge*, 130–2, 2018.

（36）ロベール・ダルブリッセルについては、杉崎泰一郎『一二世紀の修道院と社会』（原書房、一九九九年［改訂版二〇〇五

年］）を参照。中世の娼婦一般については、日本語でジャック・ロシオ（阿部謹也・土浪博訳）『中世娼婦の社会史』（筑摩書房、一九九二年）を読むことができる。また、この問題と深く関わる研究として、Katherine Ludwig Jansen, *The Making of the Magdalen: Preaching and Popular Devotion in the Later Middle Ages* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1996) がある。

（37）詳細は、Andenna, "Da monialeс novarum penitentium a sorores ordinis Sancte Marie de Valle Viridi. Una forma di vita religiosa femminile fra Oriente e Occidente (secoli XIII-XV)".

（38）バローネはローマ大学サピエンツァ教授。本章に見られる教皇権と「新しい信仰」や都市ローマの信仰社会史などを専門としている。主要な論文は、Giulia Barone, *Da frate Elia agli spirituali* (Milano: Biblioteca francescana, 1999) に収録されている。

（39）この第三会制度化をめぐる諸問題は、Raffaele Pazzelli and Lino Temperini (eds.), *La "Supra Montem" di Niccolò IV (1289): genesi e diffusione di una regola*: atti del 5 Convegno di Studi Francescani, Ascoli Piceno, 26-27 ottobre 1987 (Roma: Ed. Analecta T.O.R., 1988) を参照。

（40）禁域という言葉は、本来ならば「その内部に入ること」が禁止された領域を指すものの、女子修道院の事例では「その内部から（女性たちが）出らないこと」にも大きな意味が与えられてきた。禁域の強制をめぐる法・制度と実践については、Elizabeth M Makowski, *Canon Law and Cloistered Women: Periculoso and Its Commentators, 1298-1545* (Washington: Catholic University of America Press, 1997); Ead., *A Pernicious Sort of Woman: Quasi-Religious Women and Canon Lawyers in the Later Middle Ages* (Washington D.C.: The Catholic University of America Press, 2005) および、より一般的にはMore, *Fictive Orders and Feminine Religious Identities, 1200-1600* を参照。

（41）ボローニャのサンタニェーゼについては、Angelita Roncelli, "Domenico, Diana, Giordano: la nascita del monastero di Sant'Agnese in Bologna", in Gabriella Zarri and Gianni Festa (eds.), *Il velo, la penna e la parola: le domenicane: storia, istituzioni e scritture*, (Firenze: Nerbini, 2009), 71–91 を参照。モンテファルコの事例はしばしば引用されているが、史料編を含む次の論考が基本的。Mario Sensi, "La monacazione delle recluse nella valle Spoletina", *Santa Chiara da Montefalco e il suo tempo*: Atti del 4. Convegno di studi storici ecclesiastici organizzato dall'Archidiocesi di Spoleto: Spoleto, 28-30 dicembre 1981 (Firenze: La Nuova Italia, 1985), 71–121. ヴェネツィアの女子修道院については、Silvia Carraro, *La laguna delle donne il monachesimo femminile a Venezia tra IX e XIV secolo*, (Pisa: Pisa University Press, 2015) を参照。また、司教による女性の信仰生活の制度化については、ジョヴァンナ・カーサグランデが提示するチッタ・ディ・カステッロの事例が興味深い。Giovanna

Casagrande, "Forme di vita religiosa femminile nell'area di Città di Castello nel sec. XIII", *Il movimento religioso femminile in Umbria nei secoli XIII-XIV*: Atti del convegno internazionale di studio nell'ambito delle celebrazioni per l'VIII centenario della nascita di S. Francesco d'Assisi: Città di Castello, 27-28-29 ottobre 1982 (Firenze: La Nuova Italia, 1984), 123–57.

（42）ガッティーニはミラーノ大学教授。一九九〇年代より一貫して中世北イタリア（特にエミーリア地方とミラーノ）における兄弟会や施療院の問題を研究してきた。主著は Marina Gazzini, *Confraternite e società cittadina nel medioevo italiano* (Bologna: Clueb, 2006). 編著 Ead. (ed.), *Studi confraternali: orientamenti, problemi, testimonianze* (Firenze: Firenze University Press, 2009) は、イタリア中近世における兄弟会研究の現在の基本書。

（43）中世イタリア半島北中部の施療院については、以下の論集が出発点となる。*Ospedali e città: l'Italia del Centro-Nord, XIII-XVI secolo*: atti del convegno internazionale di studio tenuto dall'Istituto degli Innocenti e Villa i Tatti (the Harvard University Center for Italian Renaissance Studies): Firenze 27-28 aprile 1995 (Firenze: Le Lettere, 1997). 英語では、Augustine Thompson, *Cities of God: The Religion of the Italian Communes 1125-1325* (University Park, PA: Penn State University Press, 2005); Sally Mayall Brasher, *Hospitals and Charity: Religious Culture and Civic Life in Medieval Northern Italy* (Manchester: Manchester University Press, 2017) が有益。ただし、前者の研究史整理および後者の単純な「世俗化」論的枠組には首をかしげる点も多い。

（44）労働と慈善を美徳とする「聖人」の出現については、古典的な André Vauchez, "Une nouveauté du XIIe siècle: Les saints laics de l'Italie communale", *L'Europa dei secoli XI e XII fra novità e tradizione: sviluppi di una cultura*: Atti della decima Settimana internazionale di studio: Mendola, 25-29 agosto 1986 (Milano: Vita e Pensiero, 1989), 57–80 を参照。

（45）バルトロメイ・ロマニョーリは、教皇庁立グレゴリアーナ大学教授。現在のイタリアにおいて、女性神秘家と「聖人」などのテーマに関して最も精力的に研究を進めている第一人者である。近年はアンジェラ・ダ・フォリーニョに関する取り組みが目立つ。主著である論集 Alessandra Bartolomei Romagnoli, *Santità e mistica femminile nel Medioevo* (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'Alto Medioevo, 2013) は、今日の基本書である。

（46）身体の問題については、バルトロメイ・ロマニョーリ自身の論考およびバイナムの古典的名著を参照。Alessandra Bartolomei Romagnoli, "La questione del corpo nella mistica femminile medievale", in M. Chiaia (ed.), *Il dolce canto del cuore: donne mistiche da Hildegard a Simone Weil* (Milano: Ancora, 2004), pp. 35–60; Ead., "Eucaristia ed estasi: propaganda clericale e visioni nel XIII secolo", in Laura Andreani and Agostino Paravicini Bagliani (eds.), *"Il Corpus*

Domini": teologia, antropologia e politica (Firenze: SISMEL Edizioni del Galluzzo, 2015), 73–101; Caroline Walker Bynum, *The Ressurection of the Body in Western Christianity, 200-1336* (New York: Columbia University Press, 1995).

（47）近世における「神秘体験の言語」の形成については、バルトロメイ・ロマニョーリも引用するMichel De Certeau, *La fable mystique: XVI-XVIIe siècle* (Paris: Gallimard, 1982) が興味深い。

（48）中世イタリアの女性「神秘家聖人」というテーマへの導入として、今日最良の概説はIsabella Gagliardi, "Mistiche, pie convertite e clientele. Gli spazi dei "poteri non formalizzati" nelle città italiane tra XIII e XV secolo", in Alessandra Bartolomei Romagnoli, Ugo Paoli and Pierantonio Piatti (eds.), *Hagiologica: studi per Réginald Grégoire* (Fabriano: Monastero San Silvestro Abate, 2012), 1033–48. また、バルトロメイ・ロマニョーリの主著に加えて、以下の著作・論考を参照。Anna Benvenuti Papi, "La santità al femminile: funzioni e rappresentazioni tra medioevo ed età moderna", *Les fonctions des saints dans le monde occidental, 3.-13. siècle*: Actes du colloque organisé par l'École française de Rome avec le concours de l'Université de Rome La Sapienza (Rome, 27-29 octobre 1988) (Roma: Viella, 1991), 467–88; Peter Dinzelbacher, "Nascita e funzione della santità mistica alla fine del medioevo centrale", *Ivi.* (Roma: Viella, 1991), 489–506; Peter Dinzelbacher, Dieter R. Bauer and Marco Vannini (eds.), *Movimento religioso e mistica femminile nel Medioevo* (Torino: Edizioni paoline, 1993); Alastair Minnis and Rosalynn Voaden (eds.), *Medieval Holy Women in the Christian Tradition, c.1100 - c.1500* (Turnhout: Brepols, 2010);

（49）さらに付け加えるならば、この神秘体験者＝「聖女」の問題は新大陸へも及ぶ。以下の二冊が優れた導入と思われる。Kathleen Ann Myers, *Neither Saints Nor Sinners: Writing the Lives of Women in Spanish America* (Oxford: Oxford University Press, 2003); Allan Greer and Jodi Bilinkoff (eds.), *Colonial Saints: Discovering the Holy in the Americas, 1500-1800* (London: Routledge, 2015).

（50）バルトロメイ・ロマニョーリは、アルプス以北の女性神秘家に匹敵する思想を組み立てた著作者として、アンジェラ・ダ・フォリーニョのみをあげている。史料としてEnrico Menestò (ed.), *Il "Liber" della beata Angela da Foligno* (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'alto Medioevo, 2009). 基本的な研究文献として、Giulia Barone and Jacques Dalarun (eds.), *Angèle de Foligno: le dossier* (Roma: École Française de Rome, 1999); *Angela da Foligno, terziaria francescana*; Massimo Vedova and Alessandra Bartolomei Romagnoli (eds.), *Angela e Bonaventura: dalla teologia spirituale alla esperienza di Dio* (Spoleto: Fondazione Centro Italiano di Studi sull'Alto Medioevo, 2020) などを参照。

（51）一五世紀以降のキアラ会や女子修道院における文化的活動については、Gianna Pomata and Gabriella Zarri (eds.), *I*

monasteri femminili come centri di cultura fra Rinascimento e Barocco: atti del convegno storico internazionale, Bologna, 8-10 ottobre 2000 (Roma: Edizioni di storia e letteratura, 2005); Pietro Messa, Angela Emmanuela Scandella and Mario Sensi (eds.), *Cultura e desiderio di Dio: l'Umanesimo e le Clarisse dell'Osservanza*: atti della II giornata di studio sull'Osservanza Francescana al femminile : 10 novembre 2007, Monastero Clarisse S. Lucia, Foligno (S. Maria degli Angeli: Porziuncola, 2009) 収録の各論考を参照。合わせて、Gabriella Zarri, "Monasteri femminili e città (secoli XV-XVIII)", in Giorgio Chittolini and Giovanni Miccoli (eds.), *La Chiesa e il potere politico dal medioevo all'età contemporanea*, (Torino: Einaudi, 1989), 359–429 の概説も有用。

（52）Alessandra Bartolomei Romagnoli, "Mistica e costruzione della memoria: da Chiara da Montefalco a Francesca Romana", *Chiesa e storia*, 2 (2012), 109–35.

（53）Wendy Love Anderson, *The Discernment of Spirits: Assessing Visions and Visionaries in the Late Middle Ages* (Tübingen: Mohr Siebeck, 2011).

（54）本書 p. 128.

（55）ガリャルディは、現フィレンツェ大学 SAGAS 准教授。ジェズアーティ会、「聖なる狂人」およびトスカーナの地域史研究（サン・ジミニャーノ）で知られている。主著としては以下がある。Isabella Gagliardi, *I Pauperes yesuati tra esperienze religiose e conflitti istituzionali* (Roma: Herder, 2004); Ead., *Li trofei della croce: l'esperienza gesuata e la società lucchese tra Medioevo ed età moderna* (Roma: Edizioni di storia e letteratura, 2005); Ead., *"Novellus pazzus": storie di santi medievali tra il Mar Caspio e il Mar Mediterraneo (secc. IV-XIV)* (Firenze: Società editrice fiorentina, 2017). 次の書評も参照。白川太郎「Isabella Gagliardi, «Novellus pazzus»: storie di santi medievali tra il Mar Caspio e il Mar Mediterraneo (secc. IV-XIV), Firenze: Società editrice fiorentina, 2017」、『エクフランス：ヨーロッパ文化研究』第一〇号（二〇二〇年）、一八四～一九五頁。

（56）霊的指導 Direzione spirituale という用語は、対抗宗教改革以降のものである。また、日本のカトリック教会では近年「霊的同伴」の訳語が用いられる（霊的な事柄については主のみが唯一の指導者であるという前提に基づく）。歴史学においては、古代から中世へ至る信徒・信徒共同体への教導・教育・統率を分析概念として「霊的指導」と呼称している。導入的な基本書として Gabriella Zarri, *Uomini e donne nella direzione spirituale (secc. XIII-XVI)* (Spoleto: Fondazione Centro Italiano di Studi sull'Alto Medioevo, 2016); Michela Catto (ed.), *La direzione spirituale tra Medioevo ed età moderna: percorsi di ricerca e contesti specifici* (Bologna: Il mulino, 2004) を、古代から近世へ至る通史的な概説論集として、Giovanni Filoramo, Gabriella Zarri and Sofia Boesch Gajano (eds.), *Storia della direzione spirituale*, 3 vols. (Brescia: Morcelliana, 2006-2010) を参照。特に後者の第一巻序文では方法論的な

定義がなされている。また、二つの論集には、いずれもガリャルディの寄稿がある。彼女自身の方法論的論考として、Ead., "La direzione spirituale come oggetto storico: riflessioni storiografiche e problemi di metodo tra Medioevo ed Età Moderna", Direzione spirituale e agiografia. Dalla biografia classica alle vite dei santi dell'età moderna (Alessandria: Edizioni dell'Orso, 2008), pp. 207–16 を参照。

（57）イタリア半島の司牧史における第四ラテラノ公会議の意義について、*Pievi e parrocchie in Italia nel basso Medioevo, sec. XIII-XV*: atti del VI Convegno di storia della Chiesa in Italia: Firenze, 21-25 settembre 1981, 2 vols. (Roma: Herder, 1984); *Il Lateranense IV*: le ragioni di un concilio: atti del LIII Convegno storico internazionale, Todi, 9-12 ottobre 2016, 2017 を参照（特に前者の第一巻）。托鉢修道会と聴罪について、特にイタリアの事例に着目したものとして、*Dalla penitenza all'ascolto delle confessioni: il ruolo dei frati mendicanti*: atti del XXIII convegno internazionale, Assisi, 12-14 ottobre 1995 (Spoleto: Fondazione Centro Italiano di Studi sull'Alto Medioevo, 1996) を、イングランドを中心とする全ヨーロッパ的視点として、Ronald J Stansbury (ed.), *A Companion to Pastoral Care in the Late Middle Ages (1200-1500)* (Leiden: Brill, 2010); Peter Biller (ed.), *Handling Sin: Confession in the Middle Ages* (Woodbridge: York Medieval Press, 2013); William H. Campbell, *The Landscape of Pastoral Care in Thirteenth-Century England* (Cambridge: Cambridge University Press, 2018) をそれぞれ参照。

（58）聴罪司祭と「聖なる女性」の関係を広範に論じたものとして、John W Coakley, *Women, Men, and Spiritual Power: Female Saints and Their Male Collaborators* (New York: Columbia University Press, 2006) が優れている。カテリーナ・ダ・シエーナの事例については、以下の三冊が研究の出発点となる。F. Thomas Luongo, *The Saintly Politics of Catherine of Siena* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2006); Carolyn Muessig, George Ferzoco and Beverly Mayne Kienzle (eds.), *A Companion to Catherine of Siena* (Leiden: Brill, 2012); Alessandra Bartolomei Romagnoli, Luciano Cinelli and Pierantonio Piatti (eds.), *Virgo digna coelo: Caterina e la sua eredità*: raccolta di studi in occasione del 550° anniversario della canonizzazione di santa Caterina da Siena (1461-2011) (Città del Vaticano: Libreria Editrice Vaticana, 2013).

（59）ジェズアーティの事例が取り上げられている。前掲のガリャルディの主著に加え、Isabella Gagliardi, "Tradizione agostiniana e tradizione gesuata", in Sofia Boesch Gajano (ed.), *Storia della direzione spirituale II: L'età medievale* (Brescia: Morcelliana, 2010), 425–556; Ead., "Il paradosso dell'elezione divina: libertà e obbedienza nella trattatistica spirituale del tardo Medioevo", in M.D. Garfagnini (ed.), *Strumenti e strategie della comunicazione scritta in Europa fra Medioevo ed età moderna* (Firenze: Firenze University Press, 2017), pp. 1–28. を参照。

（60）ドミーニチからサヴォナローラ、ドメニカ・ダ・パラディーゾへ至るドメニコ会改革派の問題は、近年のガリャルディの研究テーマである。Isabella Gagliardi, "Il "Libro d'amor di charità" di Giovanni Dominici: alcune tracce per una lettura", in G.C. Garfagnini and G. Picone (eds.), *Verso Savonarola: misticismo, profezia, empiti riformistici fra Medioevo ed Età moderna* (Firenze: Sismel Edizioni del Galluzzo, 1999), pp. 47–81; Ead., "Giovanni Dominici e Antonino Pierozzi: dal maestro al discepolo", in Luciano Cinelli and Maria Pia Paoli (eds.), *Antonino Pierozzi OP (1389-1459): la figura e l'opera di un santo arcivescovo nell'Europa del Quattrocento*: atti del Convegno internazionale di studi storici (Firenze, 25-28 novembre 2009) (Firenze: Nerbini, 2013), 167–84; Ead., "Giovanni Dominici e Bartolomea degli Alberti: divergenti convergenze tra un frate domenicano e un'aristocratica a Firenze nel primo Quattrocento", *Archivio Italiano per la Storia della Pietà*, 2019, 241–68; Ead., "Quare sennones faceret, cum mulieribus predicare non liceret: suor Domenica da Paradiso, una "predicatrice" nella Firenze del XVI secolo", in P. Piatti (ed.), *Caterina da Siena e la vita religiosa femminile: un percorso domenicano* (Roma: Campisano Editore, 2020), pp. 315–48. カッファリーニの聖人伝的史料編纂事業は、今後さらなる取り組みが必要とされているものの、以下の二つの論考が出発点となる。Fernanda Sorelli, "Imitable sanctity: the legend of Maria of Venice", in Daniel Bornstein and Roberto Rusconi (eds.), *Women and Religion in Medieval and Renaissance Italy* (Chicago: University of Chicago Press, 1996), 165–81; Silvia Nocentini, "Lo "scriptorium" di Tommaso Caffarini a Venezia", *Hagiographica*, 12 (2005), 79–144.

（61）より詳しくは、Isabella Gagliardi,"'Manipolare" le coscienze e persuadere spiritualmente. La trattatistica religiosa rivolta alle donne", in A. Esposito, F. Franceschi, and G. Piccinni (eds.), *Violenza alle donne: una prospettiva medievale* (Bologna: Il Mulino, 2018), pp. 329–54 を参照。この問題は、以下の論集に見られる近世史の枠組、イタリアにおける規律化論の視点と接続する。Paolo Prodi (ed.), *Disciplina dell'anima, disciplina del corpo e disciplina della società tra medioevo ed età moderna* (Bologna: Il Mulino, 1994). とりわけ、以下のザッリ論考を参照。Gabriella Zarri, "Disciplina regolare e pratica di coscienza: le virtù e i comportamenti sociali in comunità femminili (secoli XVI-XVIII)", in Paolo Prodi (ed.), *Disciplina dell'anima, disciplina del corpo e disciplina della società tra medioevo ed età moderna* (Bologna: Il Mulino, 1994), 257–78. 英語では、Ead., "Gender, religious institutions and social discipline: the reform of the regulars", in Judith C Brown and Robert C Davis (eds.), *Gender and society in Renaissance Italy* (London: Longman, 1998), 193–212 が概説的。

（62）ベネデッティは、現ミラーノ大学教授職にあり、イタリア中世宗教史研究の指導的研究者のひとりとして、広く知られている。ミラーノの「グリエルマとマイフレーダの異端」の

研究から出発し、その後は異端審問研究、女性異端者研究、ヴァルド派研究などに手を広げた。近年には、文献学・考証学と密接な関係を持つ北イタリア圏の宗教史・教会史研究の伝統を引き継ぎ、史料論的アプローチを展開する。主著としては、Marina Benedetti, *Io non sono Dio. Guglielma di Milano e i Figli dello Spirito Santo*, 2nd ed. (Milano: Biblioteca Francescana, 2004); Marina Benedetti, *Inquisitori lombardi del Duecento* (Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 2008); Ead., *Condannate al silenzio: le eretiche medievali* (Milano; Udine: Mimesis, 2017); Ead., *Il "santo bottino": circolazione di manoscritti valdesi nell'Europa del Seicento* (Torino: Claudiana, 2007) など。最新の編著として、Tomaso Subini and Marina Benedetti (eds.), *Francesco da Assisi: storia, arte e mito*, (Roma: Carocci, 2019). 最新著 Ead., *Medioevo inquisitoriale. Manoscritti, protagonisti, paradossi* (Roma: Salerno Editrice), 2021 については、以下の書評を参照。白川太郎「異端審問の中世：Benedetti, Marina, *Medioevo inquisitoriale. Manoscritti, protagonisti, paradossi*, Roma: Salerno Editrice, 2021」、『エクフラシス』第一二号（二〇二二年）、掲載予定。

（63）Benedetti, *Condannate al silenzio.*

（64）ヴァルド派の通史として手頃なのは、Euan Cameron, *Waldenses: Rejections of Holy Church in Medieval Europe* (Oxford: Blackwell, 2001) であろう。キャメロンとベネデッティは、Brill 社より刊行予定の *A Companion to the Waldenses in the Middle Ages* の共編者（https://brill.com/view/title/55893?language=en. 最終閲覧日：2022/01/06）。

（65）Marina Benedetti, "La predicazione delle donne valdesi medievali", in Dinora Corsi (ed.), *Donne cristiane e sacerdozio: dalle origini all'età contemporanea* (Roma: Viella, 2006), 135–58; Ead., *Donne valdesi nel Medioevo* (Torino: Claudiana, 2007).

（66）ベネデッティのバルバ論は、Marina Benedetti, "“Sobra la cura de la salii de las vostras almas”. I magistri valdesi alla fine del Quattrocento", in Sofia Boesch Gajano (ed.), *Storia della direzione spirituale II: L'età medievale* (Brescia: Morcelliana, 2010), 407–24 を参照。ただし、必ずしも女性に限られた分析ではない。

（67）この転化については、Marina Benedetti, "Predicatori itineranti e streghe volanti: i valdesi tra Alpi e Borgogna nel XV secolo", in J.-M. Cauchies (ed.), *L'église et la vie religieuse, des pays bourguignons à l'ancien royaume d'Arles (XIVe-XVe siècle)* (Neuchâtel: Centre européen d'études bourguignonnes, 2010), pp. 227–37 を参照。アルプス地方のヴァルド派については、ベネデッティによる史料校訂がある。Marina Benedetti, *La valle dei Valdesi: i processi contro Tommaso Guiot, sarto di Pragelato (Oulx, 1495)*, (Spoleto: Fondazione Centro Italiano di Studi sull'Alto Medioevo, 2013); Ead., *I margini dell'eresia: indagine su un processo inquisitoriale (Oulx, 1492)*, (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'alto Medioevo, 2014).

(68) アポストリについては、以下の拙稿を参照。白川太郎「預言者に従う人々：一三～一四世紀転換期エミーリャ地方における終末待望とアポストリの変容」、甚野尚志編『疫病・終末・再生：中近世キリスト教世界に学ぶ』(知泉書館、二〇二一年)、七一～九五頁；同「アポストリ研究の諸前提：史料論と研究史」、『西洋史論叢』第四三号（二〇二一年）掲載予定。

(69) この事例は、Lorenzo Paolini and Raniero Orioli (eds.), *Acta S. Officii Bononie ab anno 1291 usque ad annum 1310*, 3 vols. (Roma: Istituto storico italiano per il Medio Evo, 1982), doc.,

(70) Benedetti, "Margherita 'la bella'?"

(71) バッチはフリブール大学教授。専門は中世美術史で、ベツレヘム降誕教会修復委員会のメンバーも務める。主著として、Michele Bacci, *Pro remedio animae: immagini sacre e pratiche devozionali in Italia centrale (secoli XIII e XIV)* (Pisa: Gisem, 2000) が、近年の英語での著作として、Id., *The Many Faces of Christ: Portraying the Holy in the East and West, 300 to 1300* (London: Reaktion, 2014); Id., *The Mystic Cave: A History of the Nativity Church in Bethlehem* (Brno: Masaryk University, 2017) がある。最後のものは、ベツレヘムでの作業を踏まえた内容。日本語では以下のシンポジウム報告原稿が読める。ミケーレ・バッチ（藤崎衛訳）「中世後期イタリアにおける聖なる語り、聖なるモノと幻視体験」、『死生学研究』第一六巻（二〇一一年）、二〇一～二一五頁。

(72) とりわけ、キアラ・フルゴーニの一連の業績がよく知られている。フランチェスコの聖痕に関する大著 Chiara Frugoni, *Francesco e l'invenzione delle stimmate: una storia per parole e immagini fino a Bonaventura e Giotto* (Torino: Einaudi, 2010) に加え、以下の論考を参照。Ead., "Le mistiche, le visioni e l'iconografia: Rapporti ed influssi", *Temi e problemi nella mistica femminile trecentesca*: Atti di convegni del centro di studi sulla spiritualità medievale: Todi, 14-17 Ottobre, 1979 (Todi: Accademia tudertina, 1983), 137–79; Ead., "Su un "immaginario" possibile di Margherita da Città di Castello", *Il movimento religioso femminile in Umbria nei secoli XIII-XIV*: Atti del convegno internazionale di studio nell'ambito delle celebrazioni per l'VIII centenario della nascita di S. Francesco d'Assisi: Città di Castello, 27-28-29 ottobre 1982 (Firenze: La Nuova Italia, 1984), 203–16; Ead., "'Domine, in conspectu tuo omne desiderium meum': visioni e immagini in Chiara da Montefalco", *Santa Chiara da Montefalco e il suo tempo*: Atti del 4. Convegno di studi storici ecclesiastici organizzato dall'Archidiocesi di Spoleto: Spoleto, 28-30 dicembre 1981 (Firenze: La Nuova Italia, 1985), 155–80. フランチェスコ会と図像の関係では、*Le immagini del francescanesimo*: atti del XXXVI Convegno internazionale, Assisi, 9-11 ottobre 2008 (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'alto Medioevo, 2009).

(73) 本書 p. 163.

(74) 本書 p. 165.

(75) Bacci, *The Mystic Cave*, 232-236.

(76) デイ＝メッリョはナーポリ大学准教授。ナーポリの宗教社会史を専門とする中堅で、南イタリアの現役世代では指導的立場にある一人。主著としてRosalba Di Meglio, *Ordini mendicanti, monarchia e dinamiche politico-sociali nella Napoli dei secoli XIII-XV* (Raleigh: Aonia, 2013)、師ヴィトロとの共著 Giovanni Vitolo and Rosalba Di Meglio, *Napoli angioino-aragonese: confraternite ospedali dinamiche politico-sociali* (Salerno: Carlone, 2003) がある。

(77) イタリア半島南部の宗教史については、ジョヴァンニ・ヴィトロとフーベルト・フーベンの業績が基本的な出発点である。Giovanni Vitolo, "Ordini mendicanti e dinamiche politico-sociali nel Mezzogiorno angioino-aragonese", *Rassegna storica salernitana*, 15 (1998), 67–101; Id., "Episcopato, società e Ordini mendicanti in Italia meridionale", *Dal pulpito alla cattedra, i vescovi degli ordini mendicanti nel '200 et nel primo '300*: atti del XXVII Convegno internazionale, Assisi, 14-16 ottobre 1999 (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'Alto Medioevo, 2000), 169–200; Id., "Ordini mendicanti e dinamiche politico-sociali nel Mezzogiorno angioino-aragonese", in Giorgio Chittolini and Kaspar Elm (eds.), *Ordini religiosi e società politica in Italia e Germania nei secoli XIV e XV* (Bologna: Il Mulino, 2001), 115–49; Id., "Eremiti, monaci e città nell'esperienza religiosa dell'Italia medievale", *Quellen und Forschungen aus italienischen Archiven und Bibliotheken*, 95 (2015), 3–42; Hubert Houben, *Medioevo monastico meridionale* (Napoli: Liguori, 1987); Id., "Monachesimo e città nel mezzogiorno normanno-svevo", in Francesco G. B Trolese (ed.), *Il monachesimo italiano nell'età comunale*: atti del 4. Convegno di studi storici sull'Italia benedettina: Abbazia di S. Giacomo Maggiore, Pontida (Bergamo), 3-6 settembre 1995 (Cesena: Badia di Santa Maria del Monte, 1998), 643–63. 宗教史研究者によるイタロ＝グレコ文化の概説として、Annick Peters-Custot, *Les Grecs de l'Italie mèridionale post-byzantine (IXe-XIVe siècle): une acculturation en douceur* (Roma: École française de Rome, 2009) がある。

(78) 両者については、以下の研究を参照。C. Mercuro, "Una leggenda medioevale di San Guglielmo da Vercelli", *Rivista Storica Benedettina*, 2 (1907), 74–100, 345–70; Franco Dell'Aquila, "Tre Santi eremiti in Puglia: s. Guglielmo da Vercelli, s. Corrado Bavaro, s. Giovanni da Matera", *L'eremetismo in Puglia*. Seconda giornata di studio sul monachesimo in Puglia. Laterza, 9 giugno, 1974 (Bari: Editoriale Adda, 1975), 69–78; Antonio Vuolo, "Monachesimo riformato e predicazione: la Vita di san Giovanni da Matera (sec. XII)", *Studi medievali*, 27 (1986), 69–121.

(79) ペッレグリーニはシエーナ大学准教授（ベルガモ大学のマルコ・ペッレグリーニ、マチェラータ大学のレティツィア・ペッレグリーニとの混同に注意）。一貫して都市シエーナの宗教社会史を専門とする。主著として、Michele Pellegrini,

Vita religiosa al femminile (secoli XIII-XIV), Roma: Viella, 2019.

Chiesa e città: uomini, comunità e istituzioni nella società senese del XII e XIII secolo (Roma: Herder, 2004) を参照。

（80）都市シエーナの宗教史については、*Ibid.*; Anna Benvenuti Papi and Pierantonio Piatti (eds.), *Beata civitas: pubblica pietà e devozioni private nella Siena del 1300* (Firenze: Sismel, Edizioni del Galluzzo, 2016) が基本的。

（81）都市という枠組での宗教史として、以下がある。Robert Brentano, *Two Churches: England and Italy in the Thirteenth Century*, (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1968); Thompson, *Cities of God*; Isa Lori Sanfilippo and Roberto Lambertini (eds.), *Francescani e politica nelle autonomie cittadine dell'Italia basso medioevale*: atti del Convegno di studio svoltosi in occasione della 26. edizione del Premio internazionale Ascoli Piceno: Ascoli Piceno, Palazzo dei Capitani, 27-29 novembre 2014 (Roma: Istituto storico italiano per il Medio Evo, 2017). 研究動向は、David S. Peterson, "Out of the Margins: Religion and the Church in Renaissance Italy", *Renaissance Quarterly*, 53:3 (2000), 835–79.

（82）両者の詳細は、Pellegrini, *Chiesa e città*, 159-163, 355-356, 373-374, 392-393 などを参照。

（83）グアルティエーリは、フィレンツェ大学に所属するピストイアの都市史研究者。主著として、Piero Gualtieri, *La Pistoia comunale nel contesto toscano ed europeo (secoli XIII-XIV)* (Pistoia: Società Pistoiese di storia patria, 2008) がある（筆者未見）。

（84）本書 p. 240-241.

（85）エスポージトは、ローマ大学サピエンツァの元准教授。都市ローマの宗教史、とりわけ女性の慈善活動とヘブライ人問題を専門とする。著作よりも実証的な論考を多く執筆しており、以下が代表的。Anna Esposito, "Gli ebrei a Roma tra Quattro e Cinquecento", *Quaderni storici*, 18 (1983), 815–46; Ead., "St. Francesca and the female religious communities of fifteenth-century Rome", in Daniel Bornstein and Roberto Rusconi (eds.), *Women and Religion in Medieval and Renaissance Italy* (Chicago: University of Chicago Press, 1996), 197–218; Ead., "Gli ospedali romani tra iniziative laicali e politica pontificia (secc. XIII-XV)", *Ospedali e città: l'Italia del Centro-Nord, XIII-XVI secolo*: atti del convegno internazionale di studio tenuto dall'Istituto degli Innocenti e Villa i Tatti (the Harvard University Center for Italian Renaissance Studies): Firenze 27-28 aprile 1995 (Firenze: Le Lettere, 1997), 255–72; Ead., "Men and women in Roman confraternities in the fifteenth and sixteenth centuries: roles, functions, expectations", in Nicholas Terpstra (ed.), *The Politics of Ritual Kinship: Confraternities and Social Order in Early Modern Italy* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000), 82–97; Ead., "Il mondo della religiosità femminile romana", *Archivio della Società Romana di storia patria*, 132 (2009), 149–73; Ead., "Donne e fama tra normativa statutaria e

realtà sociale", in Isa Lori Sanfilippo and Antonio Rigon (eds.), *Fama e publica vox nel Medioevo*: atti del convegno di studio svoltosi in occasione della XXI edizione del Premio internazionale Ascoli Piceno ; Ascoli Piceno, Palazzo dei Capitani, 3-5 dicembre 2009 (Roma: Istituto Storico Italiano per il Medioevo, 2011), 85–102; Ead., "L'agire delle donne romane nella trasmissione della memoria", *Mélanges de l'École française de Rome - Moyen Âge*, 127–1, 2015, 9-22.

（86）中世の「新しい信仰」が生み出した共同体については、古典かつ基本書として、Raffaele Pazzelli and Lino Temperini (eds.), *Prime manifestazioni di vita comunitaria maschile e femminile nel movimento francescano della penitenza (1215-1447)* (Roma: Commissione storica internazionale T.O.R., 1982) を参照。

（87）事例として引かれるトル＝デ＝スペッキについて、特に Maya Maskarinec, "Nuns as "Sponsae Christi": The Legal Status of the Medieval Oblates of Tor de' Specchi", *The Journal of Ecclesiastical History*, 72:2 (2021), 280–99 を参照。

（88）この点については、Esposito, "Gli ospedali romani tra iniziative laicali e politica pontificia (secc. XIII-XV)"; Ead., "Men and Women in Roman Confraternities in the Fifteenth and Sixteenth Centuries: Roles, Functions, Expectations".

（89）ロッシはヴェローナ大学准教授。司教座研究およびヴェネト地域の信仰文化（特にレプラ問題と兄弟会）を専門としている。主著および代表的な論文として、以下がある。Maria Clara Rossi, *Gli "uomini" del vescovo: familiae vescovilii a Verona (1259-1350)*. (Venezia, 2001); Maria Clara Rossi, *Governare una chiesa: vescovi e clero a Verona nella prima metà del Trecento* (Sommacampagna: Cierre, 2004); Ead., "I notai di curia e la nascita di una "burocrazia" vescovile: il caso veronese", *Società e storia*, 24 (2002), 1–34; Ead., "Gregorio IX, i frati e le Chiese locali", *Gregorio IX e gli ordini mendicanti*: atti del XXXVIII Convegno internazionale, Assisi, 7-9 ottobre 2010 (Spoleto: Fondazione Centro italiano di studi sull'alto Medioevo, 2011), 259–92.

（90）中世の遺言史料については、Attilio Bartoli Langeli (ed.), *Nolens intestatus decedere: il testamento come fonte della storia religiosa e sociale*: atti dell'incontro di studio, Perugia, 3 maggio 1983 (Perugia: Editrice umbra cooperativa, 1985) 収録の諸論考が基本的。特に女性については、ロッシの編集になる Maria clara Rossi (ed.), *Margini di libertà*: testamenti femminili nel Medioevo: atti del Convegno internazionale, Verona, 23-25 ottobre 2008 (Verona: Cierre, 2010).

（91）もちろん、本書における欠如がイタリア史学全体に共有された研究上の空白を示している場合には、それは別である。実のところ、西方キリスト教世界の外部や内部の「宗教的」に「異質」な要素と関わる問題群については研究が比較的手薄であるように思うが、それらについて論じる用意は筆者にはない。

（92）フランチェスコ会の隠修者的性格については、*Eremitismo nel francescanesimo medievale: atti del XVII convegno*

internazionale, Assisi, 12-13-14 ottobre 1989, (Perugia: Centro di studi francescani, 1991); Grado Giovanni Merlo, *Tra eremo e città: studi su Francesco d'Assisi e sul francescanesimo medievale*, (Assisi: Ed. Porziuncola, 2007) を、中世イタリア半島の都市社会と修道制については、基本書としてFrancesco G. B Trolese (ed.), *Il monachesimo italiano nell'età comunale*: atti del 4. Convegno di studi storici sull'Italia benedettina: Abbazia di S. Giacomo Maggiore, Pontida (Bergamo), 3-6 settembre 1995 (Cesena: Badia di Santa Maria del Monte, 1998) を、ケルトゥジア会とシトー会については、Rinaldo Comba and Grado G Merlo (eds.), *Certosini e cistercensi in Italia: secoli XII-XV* (Cuneo: Società per gli studi storici, archeologicied artistici della provincia di Cuneo, 2000); Paolo Grillo, *Monaci e città: comuni urbani e abbazie cistercensi nell'Italia nord-occidentale (secoli XII-XIV)* (Milano: Edizioni Biblioteca Francescana, 2008); Frances Andrews and Maria Agata Pincelli (eds.), *Churchmen and Urban Government in Late Medieval Italy, C. 1200-C.1450: Cases and Contexts* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013) などを参照。

（93）とりわけ、規律化における修道制の役割を強調するものとして、Dilwyn Knox, "Disciplina. Le origini monastiche e clericali del buon comportamento nell'Europa cattolica del Cinquecento e del primo Seicento", in Paolo Prodi (ed.), *Disciplina dell'anima, disciplina del corpo e disciplina della società tra medioevo ed età moderna* (Bologna: Il Mulino, 1994), 63–99 を参照。修道制とルネサンス宮廷の結びつきについては、Gabriella Zarri, "Bibbia e mistica alla corte estense: letture esegetiche per Lucrezia Borgia", *Le donne della Bibbia, la Bibbia delle donne: teatro, letteratura e vita*: atti del XV Convegno internazionale di studio, Verona, 16-17 ottobre 2009 (Fasano: Schena, 2012), 63–92; Ead., *Figure di donne in età moderna: modelli e storie* (Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 2017) が興味深い。

（94）Volpe, *Movimenti religiosi e sette ereticali nella società medievale italiana*; Raffaello Morghen, *Medioevo cristiano*, 5th ed. (Bari: Laterza, 1978); Raoul Manselli, *Il secolo XII: religione popolare ed eresia* (Roma: Jouvence, 1983); Giovanni Miccoli, "La storia religiosa", *Storia d'Italia*, II (Torino: Einaudi, 1974), 431–1079.

（95）古典的なイタリア宗教史研究は、それまでの教会史叙述が周縁化してきた「俗人・民衆」の主体性を回復しようと試みるものであり、対象は異なれども女性史研究と同様の志向性を有しており、枠組の転用は容易であったと考えられる。イタリアの女性史研究全体が（ジェンダー・アプローチ的な構築主義よりも）「主体性」に強いこだわりをもち、さらにマルクス主義的歴史学から強い影響を受けているという点に関しては、菊川「「性差から歴史を語る」を参照。この視角からすると、マルクス主義フェミニズムの代表的著作であるシルヴィア・フェデリーチ（小田原琳・後藤あゆみ訳）『キャリバンと魔女』（以文社、二〇一七年）が明示的にヴォルペの枠組を踏襲し、まさしく「宗教運動」論の換骨奪胎を提示し

ているのは、史学史上興味深い。

（96）より正確には、多くの新世代の研究者たちは、古典学説が措定した二項対立的構造の実体化を、トレント公会議など近世へと先延ばしにする傾向が見られる。そのため、ガッティーニやガリャルディも理念的な次元では分析枠を継承しているといえるものの、その現実への適用においては慎重かつ柔軟な姿勢を崩さない。バルトロメイ・ロマニョーリとベネデッティに触れる箇所でも論じるように、この時間軸の長期化（及び、それに伴う視野の地域的拡大）は、近年のイタリア中世宗教史研究の特徴となっている。注九八・百をあわせて参照。

（97）かつてジョヴァンニ・ミッコリは、その教会と市民社会の改革に対する志ゆえに、社会全体のドラスティックな変革という性格の薄れた後期中世の信仰を低く評価した。彼の研究は、この明確な基準ゆえに現在でも精読に値するのであるが、それに代わる歴史像の構築こそが我々の任務であろう。以下を合わせて参照のこと。Giovanni Miccoli, "Sul ruolo civile dello studio della storia", in Guido Corni (ed.), *I muri della storia: Storici e storiografia dalle dittature alle democrazie, 1945-1990* (Trieste: LINT, 1996), 13–22; Giuseppe Battelli and Daniele Menozzi (eds.), *Una storiografia inattuale?: Giovanni Miccoli e la funzione civile della ricerca storica* (Roma: Viella, 2005).

（98）近年の中世宗教史研究の傾向について、Isabella Gagliardi, "Santi, culti e santuari", *Quaderni di storia religiosa medievale*, 22:2 (2019), 29–51; Pellegrini, "Religione domestica, religione in comunità".

（99）菊川が紹介しているように、イタリアの女性史研究は性差の構築以上に「女性固有」の自立した経験に関心を抱いてきた。本書寄稿者に構築主義的視点が欠けているわけではなく、しばしば聖職者や女性による表象戦略が語られるにもかかわらず、この「主体性」への意志と本質主義的な「女性の信仰生活」理解は顕著である。菊川「性差から歴史を語る」三二八～三三二頁。なお、キリスト教史叙述における二元論的歴史観の起源が近代歴史学を超えて遡るのではないか、とする疑義はありうる。筆者は、この点についてのインテレクチュアル・ヒストリーを試みているところである。

（100）古典学説と一九七～八〇年代の研究の総合として、André Vauchez (ed.), *Storia dell'Italia religiosa I: L'Antichità e il Medioevo*, (Bari: Laterza, 1993) を参照。研究史上の画期としては、Antonio Rigon, "Frati Minori e società locali", *Francesco d'Assisi e il primo secolo di storia francescana* (Torino: Einaudi, 1997), 259–81; Gazzini, *Confraternite e società cittadina nel medioevo italiano* など。研究史は、前掲拙稿「イタリア中世宗教史研究の基本的枠組；Michele Pellegrini, "Religione domestica, religione in comunità. I laici nella storiografia religiosa sul medioevo italiano: note di lettura", *Quaderni di storia religiosa medievale*, 22:2 (2019), 451–75. なお、一三～一四世紀を挟む断絶と連続性という問題意識は、都市史などイタリア中世史研究全体に共有されているように思われる。コムーネの変容をめぐる動向として、

Giorgio Chittolini, "«Crisi» e «lunga durata» delle istituzioni comunali in alcuni dibattiti recenti", in Lacchè Luigi, Latini Carlotta and Marchetti Paolo (eds.), *Penale, giustizia, potere: metodi, ricerche, storiografie: per ricordare Mario Sbriccoli* (Macerata: Eum edizioni università di macerata, 2007), 125–54 を参照。

(101) 筆者によるこれまで取り組みとして、なお途上の試みではあるが、以下の前掲拙稿を参照。いずれも女性の預言者を中心とする人的結合と実践を論じる。白川太郎「グリエルマとマイフレーダの異端」; 同「故郷における預言者」。

(102) 一九八〇年代に生じたと思われる「俗人・民衆」から「女性」への主語の入れ替えは、二〇世紀初頭に形成された枠組が「生き延びる」のに大きな役割を果たした、と筆者は考えている。実のところ、古典的枠組の中心であった「異端者」や「神秘体験者」などの主題の再考こそが、その真の克服と継承のために不可欠な作業なのではないだろうか。そして、その作業を通じて、多様性と流動性が強調されて明確な輪郭の描きづらい近年の研究から、また新たな枠組を提出することができるのではないだろうか。

(103) 本書の価値を大いに高めているのは、各寄稿者による充実した文献注である。ベンヴェヌーティは、解説付きの文献目録を付している。先に引用した池上俊一の大著は、その注の貧弱さと拙さによって、学術的価値や検証可能性を大きく損なっている。二〇二〇年に出た『ヨーロッパ中世の想像界』(名古屋大学出版会) も同様である。

本書評は日本学術振興会科学研究費助成事業（課題番号 20J12028）の成果の一部である。